

289

289-Y313-87



1200500732640

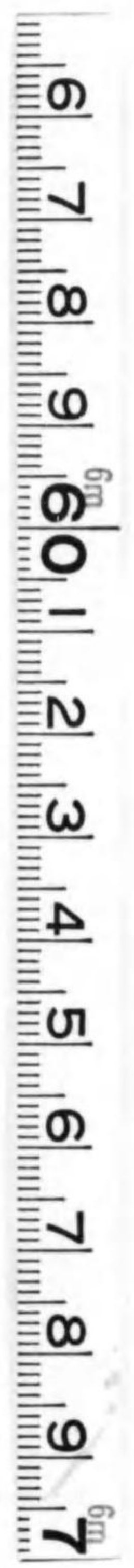
内光政述

X 複写

常在戰場

朱内光政

五



始



289
Y313
8

常戰在場

米內光政述

昭和十八年八月八日
大東亞戰爭二周年

— 大新社 —





山本元帥は「断」の人であつた………
本書の製本將に成らんとせる折、偶然にも知人の宅に於て、元帥の揮毫になる「断」の扁額を發見した。本書發行に最も相應しきものと思考しこゝに乞ふて掲載した。
(實在發行者)

序

米内光政

皇國の興廢を賭けたる日本海海戦に一少尉候補生として参戦負傷せられ、再び皇國の隆替を決する大東亞戦争に、聯合艦隊司令長官の重責を擔はれて奮戦せられ、遂に最前線の飛行機上に於て、壯烈なる戦死を遂げられた山本五十六元帥の武人としての御生涯は、正に戦ひに始まり、戦ひに終つたと申すことが出来よう。而もこの四十年の海軍軍人生活は、終始『常在戦場』の精神を以て一貫せられたのである。故元帥の人格を一言にして云へば、典型的な忠誠の人、明察果斷、大勇猛心の持主、禮節の権化であつた。その幾多の言行は、そのま

ま後人の模範であり教訓であつた。即ち元帥は身を以て率先垂範せられ、死しては皇國の守護神となり、全海軍將士並に銃後國民を激勵し、米英撃滅に邁進すべく無言の指揮を續けてをられるのである。

今や戦局は愈々重大なる段階に突入しつゝある。吾人は故元帥の精神を繼承し、元帥の心を心として、あらゆる困苦缺乏に耐へて仇敵米英を徹底的に撃滅、以て聖業を翼賛し奉らねばならぬ。これこそ山本元帥に對する唯一の供養であると存する。

故元帥の精神を繼承するがためには、元帥の風格に接する必要があることは申すまでもないことである。既に元帥の人爲に就いては、新聞に、雑誌に、或は傳記等によつて數多く紹介せられてをり、改めて述べることは蛇足の嫌ひなしとしないが、世に云ふ『山本精神』とは如何なるものか、この精神を日常生活の上に如何に活し抜くか等に就きて、些か所懐を述べ、『山本元帥に續かん』とする國民、特に青少年諸君の修養の糧に供したいと存する。

本書編纂の経緯に就ては、編纂者七田少將の序言の通りであつて、同少將の銃後を案する熱誠に動かされて、敢てその需めに應じた次第である。その勞苦に對して深甚の謝意を表する。

昭和十八年九月

編者の言葉

海軍少將 七田今朝一

大東亞戦争完勝の爲には、銃後一億國民が、前線將兵と同じ心持になつて、その持場々々で、獻身的努力を爲し、各々その自分の職責を遺憾なく盡すの外途なきことは、既に全國民の覺知さるゝ處である。

自分が曩に『銃後戰陣訓』を著したのは、その内容の實行によつて、一億國民の獻身的努力、各自分の遺憾なき遂行を希ひ、以て戰勝完遂を切望したからである。

恰もこの時に當つて五月廿一日、山本聯合艦隊司令長官が、最前線に進出せ

られ敵と交戦、遂に飛行機上で壯烈なる戦死を遂げられたとの大本營發表に接し、肅然襟を正したのであつた。

山本元帥を喪つたことは國家の爲誠に一大痛恨事である。然し、元帥の戦死は忽ち偉大な靈力を發揮して、全海軍を奮ひ起たせ、その威力を益々發揮せしめ、熱火の如き敵愾心を燃え立たせ、米英撃滅に驀進せしめつゝある。

こゝで自分が、更に今度銃後同胞に熱望することは、山本元帥が身を以て示された『陣頭指揮』『沈黙奉公』『常在戰場』等々、所謂『山本精神』を我等の精神とし、これを我等の日常生活に生かし、烈々たる火塊となつて、各々その本分を盡し、米英撃滅に突進し、飽くまで聖戰目的を貫徹せなければならぬと云ふことである。

そこで著述によつて、この山本精神を一億同胞に徹底知悉せしむることが、非常時局下極めて必要有意義であることを深思した末、米内海軍大將閣下に之を懇請せし處、直接の執筆著述は種々の都合ありて到底不可能であるが、自分

が平素より山本元帥に就て承知して居り信じて居る點を口述するから、それを基礎として編纂しては如何かとのことであつた。閣下御自身の著述が不可能であることは、誠に遺憾千萬であるが、それがどうしても叶はぬとすれば、口述編纂の方法によることも、また已むを得ぬことと諦め、その御指示に従つて、本書を編纂することとなつたのである。

要は山本元帥の爲人、その常在戦場の御精神が、最も正當に米内閣下を通じて一億同胞に徹底し、聽て、一億同胞より發揮さるゝ山本精神によつて、大東亞戦争を完勝に導かんと念願する次第である。

昭和十八年九月

常在戦場 目次

偉大なりし山本元帥……………五

元帥に續け……………八

1. 時局益々重大を加ふ……………二

2. 青少年諸君に至囑す……………一七

3. 山本精神を修養の糧とせよ……………二六

山本精神に就て……………二九

1. 常に國に殉ひて家を忘るの至誠奉公……………三六

2. 至誠奉公こそ戦力の根源……………四〇

『常在戦場』の精神……………四三

1. 銃後も戦場たるの自覺……………四七

2. 銃後の一人は皇軍將兵の血の一滴に繋がる……………五二

周到なる用意……………五六

1. 速成時代にも眞の用意を怠るな……………六七
2. 待つあるを待む用意……………七〇
3. 『白聖館との盟』の遺志を継げ……………七三

明察果斷・率先垂範……………七五

1. 工夫し啓發する態度を持つ……………八四
2. 不言實行の習性を養へ……………八九
3. 率先垂範の眞義……………九二

逞しき膽ツ玉……………九五

1. 神經の太さは戦時下特に必要……………九九

温威並び行ふ……………一〇一

1. 男子の本領は畏敬せらるゝにあり……………一〇六

公私分明・禮節を重んず……………一〇九

1. 禮は天地自然の秩序・人事の規範……………一一四

忠孝一如……………一二〇

明朗潤達……………一二三

1. 明朗なる戦時生活……………一二五

頑張り・負けじ魂……………一二七

1. 頑張りこそ必勝の道……………一三〇
2. 我々の敵は無類の頑張りを持つ……………一三一
3. 皇國民特有の粘り強さを發揮せよ……………一三七

信義……………一四〇

1. 男と男との交際……………一四四

陰徳と謙讓

1. 顯徳たる勿れ……………一四

廉直・質素な生涯

1. 結婚は御奉公の爲の結合……………一五

2. 戦時生活は質素が基底……………一七

文武兩全

結語……………一八

目次終

常在戰場

海軍大將 米内光政

偉大なりし山本元帥

昭和十八年五月廿一日、突如として山本聯合艦隊司令長官の壯烈なる機上戦死が傳へられた。恰も晴天の霹靂、國民は等しく涯しなき驚愕の淵に突き落されたやうな感に打たれた。今日この大東亞戦争の

眞直中に於て、山本聯合艦隊司令長官の戦死を見たことは、獨り海軍としてのみならず、國家の爲誠に痛惜に堪へない次第である。

故元帥の御生涯を顧みると、元帥は明治卅七年十一月兵學校卒業少尉候補生を命ぜられるや、軍艦日進に乗り組まれ、海軍軍人としての生活の第一歩を踏み出された。日本海海戦には初陣の功を樹て左指二本を失はれ、右下腿部に大火傷を負はれたのである。それより卅八年、故元帥は大東亞戦争に聯合艦隊司令長官として帝國の興亡をその雙肩に擔はれ、神謀奇策を驅使、眞珠灣港に米太平洋艦隊の主力を屠り、馬來沖に英東洋艦隊主力を覆滅され、太平洋上に於ける彼我海上勢力の均衡を一瞬にして打破、我が戰略態勢を有利に導かれたことは周知の如くである。グアム・ウエーキ島攻略、及び馬來東印度諸島比律賓の席捲、ジャバ沖海戦、スラバヤ・バタビヤ沖海戦等相次ぐ戦果は、右の戰略的

基礎の上に立つて遂行され、開戦以來一年有半にして西太平洋と東印度洋とを掩ふ廣大なる海面の、あらゆる敵據點は悉く一掃され、大東亞共榮圈建設の基礎を確立するの偉功を樹てられたのである。

曾て一少尉候補生として、帝國の興廢を賭けたる日本海海戦に参加負傷された故元帥は、再び帝國の隆替を決する大東亞戦争に、聯合艦隊司令長官の重責を負うて奮戦せられ、遂に機上に於て壯烈なる戦死を遂げられたのであつて、その御生涯は正に戦に始まり、戦に終つたと申せるのである。明治この方、眞に死處を得たる人は、政治家では伊藤博文公、軍人では故元帥と思はれる。畏くも、

天皇陛下に於かせられては、故人多年の勳功を嘉せられ、大勳位功一級に敘せられ、元帥府に列せられ、特に元帥の稱號を賜ひ、正三位に敘せられ、薨去に付いては特に國葬を賜ふ旨仰出された。明治以來今日まで

國葬の執行せられること十九回に及んでゐるが、戦死者としての國葬は故元帥を以て嚆矢とし、帝國海軍軍人としてこれほど武運に恵まれた方は他に類例がないであらう。正に武人最高の榮譽である。

元帥に續け

山本聯合艦隊司令長官の壯烈なる機上戦死の報一度び傳はるや、國を擧げてその赫々たる武勳を賞揚すると共に、一時は頼みの綱の切れたるかの如き感に打たれた様であつたが、日を経るに従ひ愈々國民の追慕の念を増すと同時に、國民は戦局の容易ならざることを見、燃ゆるが如き反撥心を強むる様になり、『よし仇を取つてやらう』『聯合艦隊司令長官ですら戦死するのだ。まして我が父兄弟息子が戦死す

るのは當然のことだ』と肚の底からなる感激奮起の『ウナリ』が強く強く響き渡るやうになつた。

この『ウナリ』は則ち誰が音頭をとるのでもない。唯、いざと云ふ場合に自然に湧き上る、自然に盛り上る、國民の底力であつて、これこそ三千年の光輝ある歴史を有つ皇國独自の、一旦緩急あれば義勇公に奉ずると云ふ崇高なる精神の發露したるものであり、然も元帥の壯烈なる戦死と、その偉大なる人格とが、常に國民の間に宿して居るべき筈の、その崇高なる精神を呼び起したものと觀るべきであらう。

故元帥の國葬に際しては、私は圖らずも、葬儀委員長を仰付かつたのであるが、葬送の途中、沿道に居並ぶ國民の嗚咽を耳に致し、一億國民の哀悼の裡に、敵愾心の盛り上るのを、身近に感ずるが如く思はれ、『元帥永遠に死せず』の感激を、新たにした次第である。則ち死したるは元

帥の假りの體軀に過ぎず、その精神は以心傳心となり、元帥亡くとも、元帥の氣持と私の氣持とがピッタリ合つてゐるが如く、故元帥の氣魄、精神は全海軍の誰もの胸にも染み込み、永遠に帝國海軍と共に生き、その精神は廣く全國民の胸に繼承されて行くことであらう。

故山本元帥以下幾多の戦死者は、『仇敵必滅』の一念に燃え上つて、後に續く一億の國民あるを確信せられ、安んじて死地に身を投ぜられたのである。親の死に當つて、親を安んぜしめるの道は、親亡きあと、親の志を繼いで親に續き、感奮興起するにあり、親はこの子を得て安んじて眠り得る所以である。忠靈への敬慕は、その忠靈の人格に、徳性に、我を活し、その忠魂義膽を我に甦らせるといふところにある。それによつて故元帥を始めとする幾多の忠魂は、永遠に生き抜く、則ち國民各自の心の中に生き抜くのである。七生報國の大義の下に戦死せられた

大楠公の精神は、日本精神の極致として、幾代を通じても變ることなく國民に繼承せられ、皇國を彌榮ならしめてゐるに觀ても明らかである。

1、時局益々重大を加ふ

山本聯合艦隊司令長官はその出陣に當つて、その知友たる目黒眞澄氏に、『皇國の存亡此の時に在り』との揮毫を寄せられたとのことであるが、この一句の中に、大東亞戦争の重大性は云ひ盡されてゐるやうに思ふ。當時米英は、抗日蔣介石を背後にあつて操り、それを自己野望の手兵化して、日本に對し無意味な抗戦を繼續せしめると共に、外交手段を以て我が行動を事毎に妨害し、或は我が交易を遮斷し、或は蘭印を誘ひ、或は自己の東亞進攻基地を再武装して、所謂對日包圍陣を形成し、

武力威嚇の手段を以て、日本に大陸よりの後退を強要するの態度に出
て來つたことは、周知の如くであると思ふ。

これに對し我方は隱忍に隱忍を重ね、只管東亞の安定と、支那事變處
理の爲、彼等の反省を求めたのであつたが、彼等は我が眞意を曲解し、益
益不遜の態度を以て臨み來り、支那よりの撤兵を強ひるばかりか、東亞
の事態を滿洲事變前の事態に引き戻さんと、の横車を押すに至つた。

則ち米英は歴史を逆行せしめて、皇國を戦はずして東亞の一隅に窒息
せしめ、これに代つて年來の野望たる東亞侵略を達成せんと、態度を
露骨化して來たのである。こゝに於て東亞の安定勢力たる皇國は、自
存自衛の爲堪忍袋の緒を切つて起ち上つた。畏くも宣戰の大詔には、
斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉
ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國

ハ今ヤ自存自衛ノ爲蹶然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナ
リ

と仰せられた。敵の野望を粉碎することなくしては、皇國の存立は全
うし得ない。故元帥が、『皇國の存亡此の時に在り』と云はれた所以
である。而してこの強烈なる責任感の下、かの赫々たる大戦果を擧げ
られたのである。

敵は緒戰の電撃に眼を覺まし、昭和十七年夏頃より漸次立ち直りを
見せ、執拗なる反攻を繰り返し、『米海軍の大目的は東洋にある日本を
永久に地球上より抹殺するにある。國民はこの事を強く自覺し最後
の勝利の爲に一切を擧げて戦争完遂に邁進すべきである』と揚言し、
或は、『生き残る爲の戦争である』などと國民の戦意を煽り、首脳部は
機會ある毎に『憎むべき日本』なる言辭を弄して國民の腦裡に憎日

感を植ゑつけ、その戦争の眞因を押し隠し乍ら、我に挑み來つてゐることも周知の如くてある。

敵が、『地球上より日本を抹殺する』ことをその戦争目的の最大なるものとしてゐると云ふ事實の中に、この戦ひが『皇國の存亡隆替』を決するものであると云ふことを知るべきであらうと思ふ。珊瑚海海戦、南太平洋海戦、ソロモン海戦等の一聯の海戦は、漸く立ち直らんとする敵の勢力を逐次叩き伏せたものであるが、彼等はその物的量的・天文的數字たる戦力に依據して、北はアラスカから、布哇・カントン・エンダベリー・サモア等の太平洋各島嶼に晝夜兼行で航空基地を建設、ソロモンのガダルカナル、ニューギニアを最前線として、これらの後方基地を連絡、昭和十八年を以て總反攻の年なりと叫び來つたのである。昨年八月以降ソロモン海を繞る海戦、更にガダルカナルの血戦等に

よつて、敵の反攻力を約半歳に亘つて、この方面に釘附となし、我方は着着と後方基地の強化を行ひ、戦路上有利なる後方展開を行つた。その戦略展開既に成り、その基礎の上に立つて大追撃に移らんとするとき、山本聯合艦隊司令長官は空に指揮を執られ神去られたのである。この悲報に引續き、敵はアリニューシヤンのアツツ島に敵前上陸を行ひ、六月下旬我が守備隊二千數百名の全員玉碎の報が齎された。更に敵は陸海空の主力を集中して西南太平洋への總反攻を企て、七月下旬ソロモン群島、レンドバ島上陸を敢行、これと前後してニューギニア島、ニューギニア等に上陸するに至つた。我が勇猛果敢なる邀撃によつて敵は甚大なる損害を蒙りつゝ、あるにも拘らず、物と量とに依據して執拗なる攻勢に出てゐることは、大本營發表によつて明らかなる通りであると思ふ。

斯くの如くにして戦ひは愈々本格的な決戦の様相を深刻化して來てゐる。局部的戦況の一進一退を以て全般を云々することは、嚴に慎むべきことではあるが、周知の如く敵は執拗極まるアングロサクソン民族であり、量的戦力に物を云はせ、遮二無二『日本を地球上より抹殺せん』との不逞極まる野望を以て我に迫りつゝある。この思ひ上れる敵の反攻を撃退粉碎することなくしては、皇國は安泰たり得ないことは云ふまでもない。第八十二臨時議會開院式に當つて、畏くも優渥なる勅語を賜はり、

今ヤ時局洵ニ重大ナリ宜シク億兆一心全力ヲ盡シテ敵國ノ非望ヲ
破碎スヘシ

と仰せられた。今後戦局は日を逐うて熾烈化すべく、重大なる決戦に突入したことをはつきりと認識し、聖旨に副ひ奉り宸襟を安んじ奉ら

ねばならぬ。

故山本元帥は、四十年の海軍生活をば『常在戰場』の心を以て仇敵必滅の精神を燃え立たせ一貫せられたが、我々は元帥の心を以て自己の心となし、『皇國の存亡此の時に在り』と出陣せられたその覺悟と責任感とを我々の覺悟と責任感となし、元帥の後に續き、戦死の報によつて湧き起つた感激奮起の『ウナリ』をば、決して一時的感傷的の興奮に終らしむることなく、この大東亞戦争に勝つて勝つて勝ち抜くまで、必ずこれを持続するとの誓を立て、仇敵米英の徹底撃滅を期せねばならぬ。斯くしてこそ、元帥の英靈に應へる唯一の途であると確信する次第である。

2、青少年諸君に至囑す

今日の大東亞戦は、正に國家の總力を擧げての綱引戦であると考へて居る。この綱引戦に勝ち抜く爲には、官と云はず、民と云はず、また老若男女の別を問はず、舉國一丸となり、『よし仇を取つてやらう』との肚の底からなる感激奮起の『ウナリ』をば、各その持場々々の綱の中に活し、力一杯精一杯、心を合せて同じ方向に引つ張る。これぞ米英を屈服せしめる唯一の途である。而してこの一億敢闘の中にあつて、特に青少年諸君に至囑する所絶大なるを思ふものである。

故山本元帥は、大東亞戦争劈頭、敵海軍の牙城たる眞珠灣強襲に玉碎したる勇士に感激し、『いま時の若い者などと申すまじく、しかと教へられ候』と銃後に便りせられたが、元帥は常に若人を愛するの情が厚かつた。今や熾烈なる決戦段階にあつて、最前線に於て兇敵撃滅に日夜奮戦しつゝある大多數の將兵は青年であり、銃後戦力増強の生産戦

の第一線に起つて奮闘しつゝある戦士も、多くは青少年諸君である。今日の戦争は青年と青年との戦ひである。この青年の力を最大限の戦力として、國の運命を賭けて戦つてをるのである。

特に敵國米は、青少年の總動員に狂奔し、學生も有力な戦闘員となしつゝある。陸軍長官スチムソンは、『戦争遂行の爲には學校教育を犠牲とするも已むを得ず』と云ひ、武器貸與局長のホブキンスなども、『戦時下に於ては、彈丸は學校の卒業證書よりも重要なり』と主張して、學校の兵營化に努めてをることである。また昨年十月米海軍司令官タワーズが発表したところによると、敵は一九四三年中に二萬七千五百臺の海軍機を整備し、これに要する操縦士爆撃手射手三萬人、機械兵器無電要員等十萬人、一ヶ月平均二千五百人の搭乗員を速成する豫定である。而してこの計畫を實行する爲に、全國廿五萬の學生(大

學高等專門學校、中國防技術關係者として必要なるものを除く八割、廿萬人を海陸軍の航空關係士官、海軍四萬五千人、陸軍十五萬人とする豫定である、と放送してゐる。

戦前から敵米に於ては、中學生は一週五時間を航空學科に割り、航空理論や、發動機構造、氣象學、通信符號などを教へてゐたと云ふことであるが、右の計畫實施と共に、各學校の教科目を全部實戰即應に改め、各學校には、「勝利の翼學生團」が結成され、從來熱中してをつた野球その他のスポーツの代りに、軍事教練を受けてゐると傳へられる。敵が學生搭乗員の養成に乗り出したのは、歐洲戰勃發以來のドイツの目覺しい空軍の活躍に刺戟されてからであり、ドイツ空軍の精銳が、既に少年時代から學校教育で訓練を開始してゐると云ふ事實に着目し、それに倣つたのである。現在ニューギニア、ソロモン、或はアリューシャンに

出撃してゐる敵機上には、アイオワ大學、ワシントン大學、ジョージヤ大學などの學生が乗つて居ると云はれ、前線の報道班員の傳へるところによると、敵の學生兵の戰意は極めて旺盛であり、驕慢な態度を以て我に挑み來つてゐると云ふことである。

敵國新聞は、『アメリカの運命は青年に懸つてゐる。軍當局は專門學校、大學校の全學生生徒に今夏（昭和十八年）までに陸海軍訓練の全計畫を終了せしめ、實戰に役立つ程度に仕上げる筈で、特に航空關係訓練には最も努力が傾注されることは、空軍を主とする今次大戰の様相に鑑みまことに喜ぶべきことだ』と報道してゐるが、斯やうに敵國が國の運命を脊負ふものは青年なりとなして、青少年の奮起を促すことに躍起となり、その掛聲に應じて敵國青少年が奮ひ起つてゐる現状こそは、大いに注目しなければならず、我國青少年諸君も、この點敵國青少年

に劣るが如きことがあつてはならぬ。既にその意氣込みは、山本元帥戦死の報に次ぐにアツツ島守備隊の玉碎等の深い悲しみの底から、『山本元帥に続け！』『アツツ島玉碎勇士に続け！』の叫びとなつて現れ、『空へ征かん』『海へ征かん』と全國青少年諸君が續々と奮起しつゝあることによりて實證されてゐる。學生諸君も『學徒よ空へ！』の標語の下に續々と蹶起し、『米に十萬の學生搭乗員あらば、我にも十萬の學生軍』『敵が一萬の義勇軍を出すならば、我もまた一萬が空軍志願せん』との意氣に燃え、嘆願の血書を以て懇願するなど、學生荒鷲志願者は萬を突破し、或は全村少年擧げて航空兵を志願した村もあるとのことである。

また全國各生産工場に働く青少年も、『山本元帥に続け』『アツツ島を忘れるな』と續々と決死隊を結成し、『職場に倒れ、職場に死なん』

との叫びを合言葉として、その若き純情を兵器生産に傾注しつゝあるとのこと。山本元帥の戦死は、無言の激勵となり、青少年諸君を感奮興起せしめつゝあるのであつて、誠に力強く感ずる次第である。

戦ひは青年と青年の戦ひであり、勝敗は他の色々な事柄にもよるところとは云ふまでもないが、青年の體力・智力・精神力如何によるところ絶大である。日本人の體力・智力・精神力が最高度に發揮せられるのは、皇國護持の大誓願に奮ひ起つた時である。前線將兵が我に數倍する大敵を向うに廻して、これを撃滅してゐるが如きは、正にそれである。産業報國會で實施した技能競練の結果によると、よき準備と、選拔せられたと云ふ感動を以てこれに當れば、すべて從來の四倍にまで能率を高めることが出来るとのことである。前線將兵は自分の體力の限度を考へ乍ら働いてをるやうなものは一人もなく、日々刻々が決死・必殺であ

る。生産工場に在る青年諸君も、この勇士と一つ心になり、『常在戰場』の故山本元帥の精神を精神として、その生産品を通じて、祖國防衛皇基守護に生き抜かんとする感激と情熱をその日々の勤勞の上に具現すべきである。則ち敵が十機の新鋭機を作るならば、我はまた十機の優秀機を作らん、敵が百發の高性能爆弾を作るならば、我もまたより以上の爆彈百發を以て應へんと、烈々たる戰意を、その職場々々に燃え上らせ、直接手を下さずとも、その愛國至誠の各自の勤勞の力と、その至誠が生み出す製品とが一つになつて、前線勇士の力となり、熱火となつて爆發し、敵兵を倒すことが出来るのである。この意味で各職域は戰場と異ならぬ。この職場を通じて敵の野望を粉碎するやうにしなければならぬと存ずる次第である。

また學校に在る學生諸君も、従來は國家と家庭の保護の下にあつて

安穩に學業にいそしむを得たのであるが、その學業は自己一身の爲のものに非ず、實に一旦緩急あらば、義勇公に奉ずる爲の學業であつたのである。一國文化も、戰爭に勝たねば無に等しい。今や一切を擧げて勝たねばならぬ。勝つて勝つて、勝ち抜く上に於ては、甘い感傷や、觀念論は戒めなければならぬと存ずる。今こそ學生諸君は、その良識と若さを國家に捧げ、自らの持てるすべてを捧げ、醜の御楯となり、光榮ある皇國體を保持し、その彌榮を期さねばならぬと考へる。

蒙古襲來の時、十四五歳の者も續々と從軍し、華々しい手柄を立てたことは有名な歴史上の事實である。藩主の恩顧に酬ゆべく、血戰死闘飯盛山の花と散つた會津白虎隊は何れも少年であつた。近くは支那事變、大東亞戰に活躍してゐる海鷲の中には、大學や専門學校を出た秀才ではなく、親のしつけを守り、他の子供が學校から歸宅して母親に小

遣ひをねだる年頃に海軍に入り、陛下の股肱として猛訓練を受け、日本人としての心を磨いた少年達が多数参加してゐる。戦ひは相當長期に亘るものと見なければならぬし、少年諸君が聽て活躍すべき時期が待つてゐるのである。この時に備へて、先輩青年に劣らぬ體力・智力・精神力を培ふべく、不斷の用意を怠つてはならぬと考へる。

3、山本精神を修養の糧とせよ

大東亞戦争は一面大東亞共榮圏の建設と云ふ建設の大業を並行してやつて行かねばならぬ。従つて、武力に於て敵を壓倒すると同時に、他面共榮圏内各民族をして、日本を心から尊敬せしめるに足るだけの學力・藝術・技術も要るし、また大國民たるの度量と精神とが必要である。この大業を完遂するが爲には、ケチ／＼した根性では駄目である。大

國民たるの心構へを以て、眞の日本人としての修養を爲さねばならぬと思ふ。眞の日本人としての修養の方法を、故山本元帥は率先垂範せられてをる。故元帥の精神と忠烈とは日本人に共通のものである。既に日本人たる以上、生れながらにして皆等しくそれを抱懷してゐる。要はそれを鍊成し、實現する心掛方法如何である。故元帥は身を以てそれを教へられてをる。故に青少年諸君は山本精神を修養の糧として、その精神を繼承すべく努むべきであらうと考へる。眞に山本精神を繼承する爲には、故元帥を眞に理解する必要がある。

故元帥を深く理解するには、長い時間と多くの材料とを要する。それは單なる想像や、片々たる逸話の克く爲し得るところではない。少くとも戦前と緒戦と、戦死さるゝまでの雄渾なる作戦、或は戦死當時の状況等を具體的に明らかにされた時に、提督としてのみならず、元帥の

人間にまで觸れて述べられるかと思ふが、現在色々の都合上、種々の制約があることは已むを得ないことと思ふ。

故元帥と私とは、まだ三十歳前後の大尉時代に、山本元帥が砲術學校教官となられた時、私も同じ教官として一つ部屋にベッドを二つ並べて、朝夕起居を共にしたのが始まりで、爾來引續き親交を續け今日に及んだ。砲術學校教官時代以後はかけ離れてゐたが、私が海軍大臣に就任せる時再び一緒になつた。その後元帥は艦隊の長官として出て行かれたが、最後に會つたのは昭和十六年の秋九月、故元帥が横須賀から上京して來られた時であつた。非常に元氣で何かしら頼母しい豫感を抱かせられてゐたところへ、二、三ヶ月経つと、大東亞戰が勃發し、續いて齎らされた大戦果に、私は胸に快哉を叫んだことだつた。それからも死の直前まで手紙の往復をやつてをつた。東京驛頭に英靈を迎へ

た。時は、悲痛と云ふか、悲壯と云ふか、何とも云はれぬ氣持ちであつた。

以上のやうな關係にある私としては、故元帥の總てに觸れて山本精神を述べると云ふが如きことは適任ではない。且又私は元來自分の目で見、自分の耳で聞いたこと以外のことを口にし筆にすることは好まないのであるが、山本精神を敬仰し、それを修養の糧とすべき青少年諸君の参考となればとの考へから、直接見聞したことを中心として以下抽象的乍ら偉大なる故元帥の片鱗に觸れ乍ら、所懐の一端を述べて見たいと存ずる。

山本精神に就て

世上山本元帥の精神を山本精神と呼び、その山本精神は即ち海軍精

神であると云はれてゐるが、私は海軍精神と、陸軍精神といふやうに別個の精神が存在するかの如き考へ方には賛成出来ない。なんとなれば、その精神の主體は、日本精神であつて、日本精神が海軍に顯現されたものが海軍精神であり、陸軍に顯現されたものが陸軍精神である。山本精神も歸するところ『日本精神』に外ならない。或る人は國葬のあつた直後、次のやうに詠まれた。

喪を取りて愈々固し大和魂

ヤマモト(山本)からモ(喪)を取れば、ヤマト(大和)となり、結局、山本魂は大和魂であると云ふ意味である。

日本精神とは一言にして云へば、たゞ一切を 至尊に獻ぐるの精神——至誠であると云へる。日本の國體は積慶(仁慈)養正(正義)重暉(睿智)の三つを理想として形造られ、天壤無窮萬世一系君民一和億兆一心の

美しい國家を形成するに至つたのである。而して天業を恢弘し、八紘爲宇の大理想に向つて不斷に邁進しつゝある。我が國民はこの限りなく尊い國體の下に 天皇陛下の御導きにより二千六百有餘年の昔から右の理想を奉體し、その理想を顯現せんが爲に、忠孝の道に勵み、常に君に忠、親に孝を盡すを以て本能として、努め來つた。かくして日本民族特有の日本精神が生れたのである。

日本精神を更に突き進めて考へると、『敬神』『崇祖』『尙武』『清淨』『質實』などの要素を擧げることが出来る。その中一番大切なのが、『敬神崇祖』である。日本は神によつて肇められ、神によつて治められて來た神國であつて、國家の元勳は何れも神として、その遺風を顯彰されてゐる。日本人の祖先はみな神の御末であり、日本國家を強く正しく明るくする爲に、何れも忠義を盡された。苟しくも日本人としてこの

世に生れた以上は、天皇陛下の御爲に命を捨て御奉公するのは當然であるが、その爲には日本が神の國であり、我々の先祖の神達が、皇室の御先祖に心から忠義を盡されたといふことをはつきり知り、その子孫たる我々は、日本人としての道を踏み外さぬやう、常に神に祈り、祖先の志を想はねばならぬ。そこで日本人としての修行を積み積むほど、

『敬神崇祖』の念が愈々益々厚くなるのは自然の理である。

故山本元帥も敬神崇祖の念極めて厚く、その質素な家庭に不似合なほど立派な神棚を設けられ、皇大神宮を奉祀され、毎朝家族打ち揃つて禮拜されてをつたと聞いてをる。また祖先を想ふの念も深く、元帥の生家である高野家は代々長岡藩の儒者と云ふ立派な家柄であり、養家山本家また長岡藩の家老の家柄であつて、故元帥はかうした立派な御先祖を有たれたといふことを心から喜ばれ、平常『先祖の名を汚して

はならぬ』『先祖の靈に喜ばれるやうな一生を送らねばならぬ』と自ら激まされてゐたと云ふことを聞いてゐる。

日本人の『尙武』の精神は、正義護持の爲破邪の劍を揮ふといふ武に對する考へ方から出たのであつて、古來皇國に於ける戦ひには他國を侵略抑壓せんとするが如き戦ひは一つもない。常に正義の下に不正義不正邪惡の徒を懲すための戦ひである。古代軍隊を動かす、不正の徒を懲罰する場合には神を祭り、神の御前に身を淨め、神託を受けて出征するを常とした。この事は今も昔も變りはない。畏くも對米英宣戰の御詔勅には『皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ』と仰せられてある。

『清淨』の精神は、虚偽がなく、明朗爽快、私心のない、一點曇りなき心境と云ふことである。『質實』と云ふことは單純素朴で、少しも飾り氣ないこと、言辭を以て飾り立てて、外觀を立派に見せかけると云ふのとは

反對に、不言實行を旨とするものである。故山本元帥は大東亞戰出陣に當つて、

國をおひてい向ふきはみ千萬の

軍なりとも言擧はせじ

と詠まれたが、この『言擧はせじ』と云ふことは、理論や、美辭を弄んだりするよりも、手つ取早く、着實に實踐する、則ち不言實行といふことを意味する。

以上の日本精神の各要素の本質は『至誠』則ち『まごころ』である。

『まごころ』といふのは偽りのない、清く正しく、眞實の心であつて、これが君に對して發して『忠』となり、父母に對して發露して『孝』となる。

日本に於ては忠を第一とすると云ふよりも、唯一と心得てゐる。『忠孝』は二名にして實は一實なのである。則ち孝の第一は父母の志を成す

ことにある。至尊に忠を致すのは、父母の志であり、祖先の志である。

故山本元帥の母堂は日露戰爭に出陣される故元帥を激勵せられ、

君がため國のためにとつくせかし

散りてもかゝる士のはな

と詠まれたとの事であるが、既に忠と云へば孝は自らその中に含まれてゐる。

日本の軍隊は『忠』を以て第一義として、『忠』の上に全身を捧げ、自己を表現することに無上の満足を感じてゐる。そこに日本軍隊の強さがある。なほ日本精神の屬性としては、光明・積極・包容・優美・淡泊・調和などが擧げられてゐるが、故元帥の言行には、これらの點が到る處に發露されてゐるやうに思ふ。則ち山本精神は、要するに日本精神であると云ひ得るわけである。

1、常に國に殉ひて家を忘るの至誠奉公

日本精神の根本は至誠『まごころ』であることは前述した通りであるが、既に武の神とられた故山本元帥は、常に國に殉ひて家を忘るゝと云ふ至誠奉公を以て一貫したる典型的の武人であり、勅諭の『終始一誠意』を遵守せられ、戦死の日まで修養された。故元帥を語つた或る人の談話の中に、『元帥は、戦争に強いことだけでは名將と云はれない。人物の修養が出来て、徳望が備はらねば駄目だと云はれ、修養の秘訣は心中常に私淑する人物を有つことである』と考へられ、幼にしては長岡藩家老河井繼之助に私淑され、更に海軍に入つては東郷元帥に私淑される等、故人や先輩に學ぶことを常に心掛けてをられた。また明治天皇の御製を謹寫しては平素の修養をされた』と云ふ個所がある。

つたと記憶する。元帥は前述の如く日露戦の日本海海戦に於て、日進艦上で奮戦せられ、二本の指を失ひ、下腿部に大火傷をされた。後年知人に、『自分は日露戦で半身を火葬にしたのだから、残る半身を皇國に捧げる機会を待つてゐるのだ』と話されたといふが、若い時にあゝ云ふ試煉に遭ふと、平素平凡に暮して居つた人などより、色々の點でかう云ふ時にはかうしなければならぬのだといふ事を、知らず識らずの間と云ふか、修養しようとして修養するのではなく、自然に修養されるのではないかと思はれる。

要するに元帥の求むる所、選ぶ所は功名に非ず、至誠にあつた。その死處の如き問ふ所ではなかつた。元帥が開戦直前詠まれた歌に、

大君の御楯とたゞにおもふ身は
名をもいのちも思はざらなむ

といふのがある。

西郷隆盛は『地位もいらぬ名もいらぬ命もいらぬ人物でなくては共に語るに足らず』と云はれたが、名利を逐つて命を惜しむやうな人では、口先や形式でどのやうな立派なことを云つても、肚の底からの至誠のない人であるから、虚言であり、實際難局に直面しては何事も出来ない。名をも命も思はない人は、何事にも全生命を打ち込み、命を投げ出す人である。このやうな人は、政治をやらしても、經濟をやらしても、教育をやらしても、素晴らしい力を發揮するに違ひない。我等は日本の生成發展の陰には、幾多の『名をも命も思はぬ』忠誠一貫の士が活躍されてゐる事實を想はねばならぬ。

嶋田海軍大臣はラジオ放送の中で、故山本元帥の最期の模様について、『この間元帥は終始泰然自若、軍刀の柄を固く握りながら最後の瞬

間まで、主將として誠に崇嚴なる姿勢を持して居られた……』と語られたが、生死を超絶せられてゐた元帥は、恐らく最後の瞬間まで、戦死といふやうなことは念頭になかつたことと察せられる。

昭和十七年十二月、天皇陛下の伊勢神宮御親拜を拜承した元帥は、一知友に宛て、

『天皇陛下の伊勢神宮御親拜を拜するに當りては誠に恐懼措く所を知らず、此の御一事に對し奉りても、第一線指揮官として頭髮の尙未だ悉く白からざるの不忠を自ら深く恥づる次第に御座候』

との前線よりの便りを寄せられてゐたと云ふことを、私は元帥の戦死直後、ラジオ放送で初めて知つた次第であるが、至誠奉公の一念この數文字の中に躍如たるものあるを感じ、感激に堪へなかつた。則ち故元帥は聯合艦隊司令長官として、日夜如何にして宸襟を安んじ奉るべき

かに肝膽を碎き、その頭髮のなほ白くないのを見て、その憂ふる所の足らず、盡すことの全からざることを自ら責められたのである。その忠節は凜乎として人を泣かしめるものがある。

元帥は死の瞬間まで國に殉ひて家を忘るの至誠奉公を以て一貫せられたのである。戦場に於て勝つには膽略も智勇も要るが、これを眞に正しく活して行くのは、忠誠の精神である。如何に膽略あり、智勇ありとも、至誠奉公の忠誠心乏しければ、その半分も用をなさない。

故元帥は満身忠誠の前に潔く生命を投げ出すことを惜しまなかつた。それ故にその膽略、智勇は生きて、神謀鬼算となつて發露し、素晴らしい戦果を挙げられたのであると思ふ。

2、至誠奉公こそ戦力の根源

故元帥は前述の如く修養の秘訣として、『心中常に私淑すべき人物を有つことである』と云はれたが、これは單に軍人のみならず、一般國民にも通ずる言葉であると思ふ。而して國民就中青少年諸君は、私淑すべき人物として、故元帥を得たのではなからうかと考へる。故元帥が功名を選ばず、忠節の至誠を以て一貫せられたが如く、日本人のすべては、至誠奉公と正反對の『私心』に發する利己主義や立身出世主義を返上して、忠誠の大和魂を以て一貫するやうにしなければならぬ。これが我が國の眞の決戦體制であると存ずる。

前線に於ける戦局の一進一退に對して、傍觀者のやうな立場からこれを眺め、その一退が自己の生産上、或は職務上の努力精進足らざるが故に非ずや、戦時生活不徹底の故に非ずや、との強烈なる責任感を自覺することが出来ないといふ人は、未だ忠節至誠足らず、眞の決戦戦士に

なり切つてゐない證左であると考へられる。故元帥が自分の頭髮白からざるの故を以て、その盡すことの全からざるを自ら責められたと同じやうに、すべての國民が常住不斷に反省自察し、與へられたる仕事に全力を集注することは仇敵必滅のための戦力増強の上に不可欠の要件のやうに考へる。

故元帥が遵守したる『終始一誠意』の勅諭は、軍人のみに賜つたものに非ず、すべての國民に賜つたものと拜察せられる。忠節は『至誠』によつて顯現される。『誠』こそは、一切の日本人の行動の前提でなければならぬことは前述した通りである。『まごころ』なきものは、如何ほど技藝に熟し、或は學問に長じても、なほ木偶人に等しいのである。『誠』のない言説には迫力はない。『誠』のない製品は忽ち破れ、使用に堪へなくなる。これが武器に現れ、ば、如何に精強を誇る勇士であつても、

敵を倒すことが出来ない結果となる。至誠奉公は軍人が戦場に臨む時のみに發現されるべきものではなく、全國民の日々の生活の上に發揮されて行かねばならぬ。『大君の御楯とたゞにおもふ身は名をもいのちも思はざらなむ』との故元帥の歌は、かくの如き日本人の至誠の極致たる『滅私奉公』を示されてをる。

山本精神即大和魂たる所以であり、『忠節』『至誠』が戦力の根源であることを知るのである。

『常在戦場』の精神

故元帥は『常在戦場』と云ふ言葉を座右の銘とされてゐた。この四文字は元帥の故郷長岡藩の藩風を作つた根本精神であり、藩祖牧野忠

成の遺した『參州牛久保の壁書』二十七項目中の第一項にある文字で、故元帥は幼時からこの四文字を庭訓の第一義として訓育され、一生をこの四文字の精神によつて終始一貫、長岡武士の後裔たることを自負せられ、この四字を人にも書き與へられてゐたものである。『常在戦場』と云ふことは、讀んで字の如く、常に戦場に在るの精神であり、意約すれば、常に死を決してをることである。葉隠に『毎朝、毎夕、改めては死に、死に、常住死身に成りて居る』と云ふ一節があるが、これと同じである。

死を決するのは、死に捉はれてゐることではなくして、生死の念から離脱することである。日蓮上人は、『生死の常體不生不滅と覺るより外に生死即涅槃はなき也』と云はれた。人格的又は自覺的な身體は、生死の相對を超え、絶對に死せざる永遠の生となる。萬世一系の皇國

にあつては、個人は永遠的な結びの内にある。死は個人生命の變調を意味するが永別ではなく、永遠的な民族生命の内にあつて、永久的な臣民道を實踐する。これが日本人の死生觀である。

故元帥は『空染む屍』とられたが、元帥は自己の死によつて 至尊に對し負ひまつる責任を果し得るとは夢にも考へられなかつたに相違ない。元帥は生きて戦場に蹇々匪躬の誠を盡し、死してなほその國家に負ふ武人の責を果されつゝあるのであつて、その忠烈は萬古に生きてゐる。『常在戦場』に徹し、毎朝、毎夕死に死に『常住死身』であるから、何時死んでもよい用意はいつも整へられてゐたのは當然である。或る人が嘗て故元帥の許しを得て、元帥の机の中を見て、そのキチンと整頓されてをるのに驚いたところ、故元帥は、『机の中が亂れてをるやうでは戦ひは出來ぬ』と云はれたとのこと、故元帥にあつては日々が

戦場であり、常に死を決せられてをつたのである。

普通の人は戦場に臨むと、戦場心理と云ふものが動き、平常十の力ある者は、この戦場心理の作用を受け、三程のマイナスとなつて、七の力より出ないものであるが、故元帥にあつてはこの戦場心理と云ふものがなく、戦場に馳驅し乍らも、平時演習を指導すると何等異ならぬ心境にあつたと思はれる。故に平常の十の力は十なりに發揮されてをつた。これは『常在戦場』の精神が、この三のマイナスを常に克服してゐた證左と見られよう。前線から歸つた人の話を聞くと、最前線においてまづい事があつた時でも、長官としての故元帥の悠々たる態度に接するや、心の沈みは一時に消え、氣を引き立たせられたとのことである。この點典型的な指揮官であつたと思ふ。

1、銃後も戦場たるの自覺

『常在戦場』と云ふことは、單に武人のみの精神とすべきものではなく、一般國民も大いに學ぶべき精神であると存ずる。今日の戦争は前線と銃後と區別し得られるものではない。國家國民の全力を擧げて戦はるべき國家總力戦である。宣戦の大詔に仰せ出された如く、天皇陛下は、この戦に於て、單に『陸海將兵』の力戦、『百僚有司』の勵精を命じ給ふのみならず、更に一般臣民我等に命じ給ふに、

朕力眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戦ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ

と宣し給うたのである。則ち老若男女乃至は賢愚貧富の別なく、その分擔任務を遂行し、『其ノ本分ヲ盡』すべき絶對の使命を有すること

を厳かに諭させ給うたのである。

近代戦は周知の如く航空機の異常な發達の下に戦はれ、敵國本土の爆撃を随伴する。昔は、故國を遠く離れてをつた戰場であれば、敵國の謀略戦を除けば、銃後は安全と考へられてゐたのであるが、今日にあつては、敵機一度び國土に來襲すれば、忽ち戰場化するのである。爆撃に對する防衛戦、或は落下傘部隊との交戦等、現に前線に於て戦はれてをるが如き戦闘場面が、銃後にも出現するのである。前線と銃後の障壁といふものは、今日ではあり得ない。しかも敵國は眞劍になつて我が本土を窺ひつゝある。敵は我が本土盲爆によつて、我が國民の戦意を破摧し得るが如くに妄信しつゝあるのであつて、總反攻の終局目標をこゝに置いてゐることを忘れてはならぬ。

今日我等が安穩であり得るのは、皇軍將兵の身を以てする敵戦力の

破摧が、大陸に南方に、或は本土の周邊に間斷なく行はれてゐるからであるが、もし敵國に皇軍將士に匹敵する一人の愛國者が現れて、我が眞珠灣強襲の如き必死の爆撃行をなすならば、今日唯今と雖も、日本空襲は可能であらうと思ふ。故にその安穩感に狂れて、自ら戰場に在るの自覺を遺忘するが如きことあらば、不意の打撃に思はぬ失態を演ずることになる。『常在戦場』こそ、正に今日我が國民の日常生活の上に具現されねばならぬと存ずる。

則ち全國民は故山本元帥に倣つて、各自が戦闘員であるとの自覺の下に、自ら死身であると觀念し、その一人々々が、常に戰場に在るの心持を以て、日々の生活を國家目的に合致せしめ、最大限の力を發揮して行くことによつて、初めて國家の力は最大限に發揚され、偉大な戦力となると考へる次第である。

明治天皇の御製

國をおもふ道に二つはなかりけり

軍のにはに立つも立たぬも

前線と銃後と云ふ二元的な觀念に支配されるやうでは、今日の戦争に對する心構へがまだ十分でない證左である。前線の將兵が至誠一貫、『天皇陛下萬歲』の下に一身を投げ出して敢闘し、只管祖國の彌榮を祈念しつゝ、水漬く屍、草むす屍となつて、一步々勝利の基礎を固めて行きつゝある一方に於て、國民の一部の者が、この前線に於ける同胞と同じ心になり切れず『利己』や『放埒』と云ふ平常の状態を持續するならば、總力戦に於けるプラスは、常にかゝる不心得な人のためにマイナスされることになる。故元帥の『常在戰場』が全國民に徹して、全國民が死身になつた時こそが、本當に日本の底力が出る時であると思ふ。

2、銃後の一人は皇軍將兵の血の一滴に繋がる

戦勝は時として人を盲目にする。戦時にはこの心の敵の俘囚となることが最も恐ろしい。古人は『勝つて兜の緒を締めよ』と云つた。

明治天皇御製

戦のかちにほこりてむらぎもの

心ゆるぶなわがいくさびと

緒戦の戦果が餘りにも華々しかつたがため、國民の一部には、もうこれで一安心だ、今後は兵隊さんにお任せして置けばよい、樂々勝てるのだと考へるやうな人も出た。最も危険なのは自惚である。自惚は自信と同じではない。自信は正しき認識の上に立つが、自惚はそれを度外する。自信と自惚とは千里の差であり、自惚は自滅への道と知らね

ばならぬ。

緒戦の大戦果によつて、日本はやつと有利な態勢を得たのであつて、この有利な態勢の上に立つて、更に敵を追ひ詰めなければならぬのである。敵も緒戦の惨敗から立ち上つて、反攻を呼號して來てゐる。これを撃碎して、更に前進しなければ勝利することは出來ないのである。故に戦ひは今後にある。自惚どころではない。更に發奮して、敵の息の根を止めるべく、非常の意氣込みを以て、進まなければならぬのである。國民が戦果の華々しさに眩惑されて、自分一人位は怠けてもと云ふやうな考へを起すことになる、一人は二人となり、千人となり萬人となり、遂にはすべての人がその不心得をすることになる。

飛行機を一機でも多く、戦車大砲を一臺でも多く作れば、それだけ仇敵を撃ち倒すことが出來るのに、工場の工員が右のやうな考へて怠け

ると假定すると、武器を豫め豫定して戦つてゐるのに、補給されない結果となり、味方は苦戦して勝利を得ても、死なせなくてもよい勇士を死なせ、或は傷ける結果となる。平時は單なる怠けて濟むかも知れないが、戦時下にあつては、銃後國民の一人々々は前線將兵の血の一滴に繋がれてゐるのである。こゝに國家總力戦の姿がある。自分の身だ、自分の勝手に行動してよいと考へると大きな不忠になる。

今次歐洲大戦以來、第六部隊と云ふ言葉が生れたことは、周知の如くであると思ふ。これは、戦争には陸海空の三つの部隊の外に、宣傳部隊(第四部隊)更に敵中の味方たる第五部隊があるが、自分が斯くせんとし、てするのではないが、結果的には間接に敵を利すると云ふ利敵行爲者を指して第六部隊の名前をつけたものだといふが、工場で怠けるもの、畑でサボるもの、机の上で怠けるものは、敵に武器を與へ、食糧を與へ、色

色の智慧を與へることになる。則ちなすべき分擔使命を熱心に遂行しないことは、それだけ國力・戦力を低下せしめて、敵を利する結果となる。怠けるといふことは、戦時下に於ては、個人の不道德とか損とかいふ低い意味でなく、愛國者の恥づべき行爲となるのである。

各自の個人の力と云ふものは、國民全體の總和から見れば、極く小さいのであるが、その小さなものが集積されて、國家の戦力となる。個は全に通ずる。一人々々は小さいが、その一人々々の心がけが少しでもだらけると國力は急に萎靡し、少しづつ精を出すことによつて、國力は幾倍にも、幾十倍にもすることが出来る。一人の力の絶大なるを思はねばならぬ。單に算術的に頭數だけで、國民の力を計ることは出来ない。國民の意氣を旺盛ならしめて、國難を突破し勝利を確保する途も、詰る所は、この道理を出でないと思ふ。

今日まで勤勞に對する考へ方は、苦痛であり、生活のため、金儲けのため、人生の犠牲であると考へる者が多かつたのではないかと思ふが、これは個人主義の勤勞觀であつて、日本人の理想たる『滅私奉公』とは反對である。勤勞は國家に對する積極的な奉仕であり、日々の仕事は國家的に寄與する輝かしいものであると云ふやうに考へて、前線勇士が挺身御奉公すると同様に、各自の勤勞が國家を偉大にする重要要素の一であるといふ歡喜に生き、勤勞を蔑視し、怠惰を幸福と考へるやうな舊觀念をなくさなければならぬと考へる。口先の皇軍感謝ではなく、身も心も將兵と一つ心になつて、それ／＼與へられた職域に於て、日の責務を果し、その能力を最大限に發揮して行くことが、眞の感謝の仕方であると信ずる。今こそ全國民一人残らず故元帥の『常在戦場』の精神を精神として、各自の使命の重大さ、責任の重大さを自覺し、一億

一心となり戦力の増強に邁進し、仇敵必滅を期さねばならないと思ふ。

周到なる用意

故元帥は前述の如く『常在戦場』の信念に終始され、その日常には一分の隙もなく、ポケットには常に古ぼけた手帳が隠されて居った。私の知る範囲でも、論より證據はこれだと云つて古手帳を出され、相手の議論を封じたことは度々あつた。大正十一年八月五日、華府軍縮會議の條約批准成つて以來、帝國海軍は五・五・三の劣勢を補ふために、所謂月火水木金の猛訓練を開始した。故元帥は大正十三年末に霞浦航空隊教頭兼副長となつて海軍航空隊の育成に精魂を傾けられた。當時元帥は飛行機は將來作戰の主兵力となると肚の底から思ひ込まれ

て周到なる準備と訓練に當られた。昭和三年に航空母艦赤城艦長になつたが、元帥は、『物質的軍備の劣勢は精神的訓練によつて補はねばならぬ』と云ふ觀點から、實戦よりつらい猛訓練を續行、某島沖の演習に於ては、吹き荒ぶ強風を衝いて一舉に〇〇機の飛行機を母艦から飛ばせ、一部未歸還機を出したほどであつた。

元帥の知友の一人が、當時元帥が同窓會席上に於て、その訓練の苦心談を述べたことがあると、最近次のやうに新聞紙上に發表したのを見て、感慨深く思つた次第である。

『我海軍航空隊に恃むところは精神と技術の外はない。飛行機の製作に於て彼に一日の長がある。我々も負けないうやうにやらねばならぬが、我々はたゞ、死を賭ること歸するが如しといふ大和魂を以て平素猛訓練をやる外はない。人はよく日本人は器用だから、操縦

が巧妙だから發達が早いと云ふが、そんなことは當にならぬ。我々はたゞ猛訓練によつて、眞の技術を身につけるより外はない』

故元帥は昭和五年航空本部技術部長(當時少將)となつたが、技術向上にも大いに努力せられ、自ら航空工學の難問題を買つて出て遮二無二技術發達のため挺身されたが、當時元帥は常に各國空軍一覽表をポケットに入れて持つて居られたと聞いてをる。そこにも周到なる用意のほどが窺はれる。元帥が技術部長の頃、帝國海軍航空機は母艦又は軍艦から飛ぶ小型機が主であつたが、島嶼を中心とする將來の海上作戦においては陸上基地より出發する大型機の必要を認められた。故元帥は當時の航空本部長松山中將と共に、三菱に陸上攻撃機を製作せしめた。昭和十二年支那事變勃發するや、荒天を衝いて渡洋爆撃を敢行して世界を驚倒せしめた陸上攻撃機は、元帥の努力に負ふところ多

いやうに考へられる。

昭和八年元帥は航空戦隊司令官として活動、九年にロンドン軍縮會議の豫備交渉代表として活躍されたが、その最中に故元帥は新聞記者と會見され、飛行機の體當り戦法を説いたと云ふことを當時隨行した新聞記者が回顧して次のやうに述べてをるのを新聞紙上で見て、航空戦隊司令官としての元帥の猛訓練を想つた次第である。

『一日元帥と會食した時、飛行機の體當り戦術なるものを私は初めて聞いた。君は僕を亂暴な男と思ふだらう。然し考へて見給へ、艦長は艦と運命を共にする、飛行機の操縦士が機と運命を共にするのは當然ぢやないか、飛行機は軍艦に比べて小さいが、操縦士と艦長とは全く同じだ、僕は今度日本に歸つたら、もう一度是非航空をやる。さうして僕が海軍にゐる以上は、飛行機の體當り戦術は誰が何と云

つても止めないよ、君見てみ給へ」と云はれた。眞珠灣攻撃の第一報を見た時も、私は今更のやうに元帥の姿をはつきり目の前に見た。故元帥はロンドン軍縮會議から歸ると、航空本部長となり、十三年海軍次官のまゝ、航空本部長を兼ね、十四年聯合艦隊司令長官に就任されたが、機上戦死を遂げられるまで、故元帥の海軍生活の半生は、飛行機と共に在り、その間用意周到なる準備と訓練を以て終始せられたのであつた。イタリヤ新聞は故元帥を以て『海空戦と云ふ近代戦の創始者』と報道してをるとのことであるが、兎に角帝國海軍航空隊育成の上に、大きな足跡を残されてゐると思はれる。

故元帥は昭和十一年十二月、永野海軍大臣の下に次官となり、十二年林内閣に於て私が海軍大臣となり、近衛平沼三内閣と引續き留任する間、次官として私を輔佐されたが、故元帥の用意周到さは、この期間を通

じ色々痛感された。前述したポケットの古手帳もその一例であるが、元帥は平素の事務などもテキパキと処理せられ、机の上に書類を積み重ねて置くやうなことはなかつた。従つて面會者が來ても待たすやうなことなく、何時でも面會出来る用意をされてゐた。私は大雑把で何も判らぬ。元帥はこのやうに用意周到な人なので、すべて元帥にやつて貰つて居つた。結局私が海軍大臣を二年近く大過なしにやり終へたといふのは、みな元帥のお蔭だと云へると思ふ。

故元帥は昭和十四年八月、阿部内閣成立と共に聯合艦隊司令長官に就任された。當時元帥は同郷の祝賀會席上に於て、その責任の重大さに、就任後一ヶ月になるがまだ一夜として安眠したことがないと云ふことを述べられたといふ。この事を知友が次のやうに新聞紙上に發表されてゐるのを見て、さもあつたらうかと感じ入つた次第である。

即ち、

『世に成敗を問はず全力を盡すといふ語がある。私も軍縮會議の時は成功不成功を問はず最善を盡して來ると云ふことが出來たが、今度の任務には成不成の問題はあり得ない。いかにしても聯合艦隊必勝の確信を得なければならぬ。このため私は安眠出來ないのである』

と、云はれたとの事である。

『それから約一ヶ月位して“もう安眠出來たか”と問ふと、元帥はニツコリ笑を含んで“安眠出來た”と云はれた』

との事であるが、かくの如き強烈なる責任感の下に、周到なる用意をされ、艦隊内に於ける航空部隊の編制指揮系統及びこれが運用等について幾多の改革を行はれたるやに聞いてをる。

猛訓練は帝國海軍の傳統であり、故元帥のみについて申されないことではあるが、日米間の風雲急を告げるや、聯合艦隊の訓練は一段猛烈となつたと云ふことを、當時旗艦乗組みの航空本部員上出中佐が語り、『一週間も續くと元氣潑刺たる若い者も流石に疲れを覺えて來るやうな激しさであつた。それにも拘らず長官は晝となく夜となく、毅然たる姿でいつも艦橋に立ち續けられた。これは體力が續くといふよりは、深い精神から來るのだといふ様に思はれた』と述懐してゐる。

大東亞戦開戦直前、元帥の用意は既に成つてゐた。必勝の信念を固められたものと思はれる。當時元帥は知友に宛てて次のやうな便りをされてゐたと云ふことを新聞紙上で知つたのである。

『戦争が始まれば、陛下の御命令によつて、身命を擲つて戦ふ積りだ。御稜威の下、絶対に勝利の見込みがある。海軍のことだけは私が引

受けた。御心配いりません。しかしどうしてこの戦果を收拾するかは私共の任務ではありません。これは政治家にお任せします』

後醍醐天皇が北條氏を誅伐しようとお思ひになり、その謀事が漏れて笠置山に遷り給うた折、楠木正成を召して賊を討つ策を御下問になつた。その時正成は、『私が生きて居ります間は、どうか御宸襟を惱まし給はぬやうに』と申し上げたといふ。『私が居ります間は御心配を遊ばしませぬやうに』といふことは、慢心や自惚から發せられる言葉ではなく、賊徒に對して絶對勝たねばならぬと云ふ強烈なる臣道の責任感より發せられるものである。故元帥の『御稜威の下、絶對に勝利の見込みがある』と云ふ言葉は必勝の信念であり、『海軍のことだけは私が引受けた、御心配いりません』と云ふ言葉は強烈な責任感の現れて、前述 聖上の御親拜を拜承して、『第一線指揮官として頭髮の尙

未だ悉く白からざるの不忠を自ら深く恥づる次第』と云はれたのと同じ心境の發露であると思はれる。故元帥は、

明治天皇御製

うつせみの世のためすゝむ軍には

神も力をそへざらめやは

を常に謹誦されてをつたと聞く。また開戦直前、知友に宛て次のやうな便りを寄せられたと云ふことを新聞紙上で拜見した。

拜啓益々御清健、此度は浦波號にて南洋を御視察相成候よし奉多謝候、世上、机上の空論を以て國難を弄ぶの際、躬を以て自説に忠ならむとの眞摯なる御心掛けには敬意を奉表候、但し海に山本在り以て御安心、などは迷惑千萬にて、小生は單に、

小敵たりとも侮らず、大敵たりとも懼れずの 聖諭を奉じて日夜孜

我と實力の練成に精進致し居るに過ぎず、恃む處は慘として驕らざる十萬將兵の誠忠のみに有之候、併し日米開戦に至らば、我が目ざすところ、素よりグアム、比律賓にあらず、將又布哇、桑港にあらず、實に華府街頭、白聖館との盟ならざるべからず』

その出陣前の歌、

千萬の軍なりとも言舉せじ

とりて來ぬべく思ひ定めたり

と共に、烈々たる氣魄を感ずることが出来る。元帥は開戦直後、郷里長岡の知友に宛て、厯大な書類を送つた。その書類は、故元帥が長岡附近から出た兵學校の生徒の全保證人となつてゐた關係上、それらの生徒の成績、缺點、美點等、將來のことなど細々と書き込み、今後の面倒を見て欲しいと、既に戦死の覺悟で依頼したものであつたといふことを、その

知友が語つてゐるが、かくの如く元帥は、周到なる用意に終始せられ、大詔を拜して粉骨碎身せられたのであつて、この用意、心構へは國民の大いに學ぶべき點であると思ふ。

1、速成時代にも眞の用意を怠るな

『ローマは一日にして成らず』と云ふ言葉は有名であるが、何事も一つのものが結實するまでは容易ならざる苦心を重ね、周到なる用意と準備をなさねばならぬと云ふ生きた教訓を故元帥に見ることが出来る。大陸軍も、大海軍も、大空軍も、それらの基礎である大産業も、一日や二日で出来るものではない。根氣よく、倦まず撓まずコツ／＼と用意されなければならぬ。近代戦は一大消耗戦であり、何よりも速度が重

んじられる。軍隊の補充、技術家の養成、人物の錬成等々、共に速成の方法を以て行はれてをる。これは差し當つては仕方のないことだと思ふ。今日の青少年諸君は、頭も進み、腕も冴えて、速成でも結構役に立つのである。また分業といふ近代産業に於ては、素人でもすぐ仕事に馴れることは、徴用工の例に見ても明らかであると思ふ。しかし、魂の籠つた仕事は、それが如何なる仕事たるを問はず、相當の年月を習練しなければならぬ。従つて速成一點張りであつてもいかぬ。速成と共に、更に内容の訓練を積み、地味に磐石の礎を置く用意を怠つてはならぬと考へる。則ち速成して應急の措置に應ずる一方にあつて、コツ／＼と本當の腕のある人物、優れた人物の習練をなすべきであると思ふ。

飛行機にせよ、大砲にせよ、機關銃にせよ、兵器と云ふ兵器は、出来るだ

け最新式のものでなければならぬ。最新式と云ふものは、最新式(研究)の學問の産物だと云ふ意味と考へてよい。優秀な兵器を、空中陸上海上海中に十分持つことが、當面の對米英撃滅戦争に必要なばかりではなく、將來、我が國が世界に雄飛するために、何よりも必要なものである。そのためには、色々の原料も澤山必要であり、學問も發達させねばならぬ。少數の人々が學問するだけではまだ足らぬ。誰でも必要とあれば、飛行機、戦車を操縦することが出来る、いつでも鐵砲を執つて狙ひ外さず撃てる、位になつて置かねばならぬと考へる。

今、米英ソを敵として戦つてゐるドイツの機械化部隊の兵士は、すべて専門の技術家であると云はれるが、精密な兵器を自在に操縦するほどの兵士としては、當然かくあらねばならぬであらう。我が國空軍の精銳たるの要素は、一に精神力と、優秀な機械と操縦の巧みさにあるこ

とは周知の如くである。精神力の旺盛如何が勝敗を決する根本要因であることは云ふまでもないことであるが、その精神力に優秀な兵器、猛訓練による技術腕が揃はなければ、戦ひには勝てない。かういふ要素は急に思ひつきで出来るものではない。根本的には、國民全體として、技術や科學を尙ぶ精神を昂めることが必要であらうと思ふ。特に青少年・兒童のうちから學問と技術を尙ぶ氣風と習慣をつけることが必要であると考へる。そして「コツ」と國家の御用に立つべく用意しなければならぬ。

2、待つあるを待む用意

前述のやうに、今日の戦ひには前線銃後の區別を明瞭につけることは出来ない。敵機來襲によつていつ戰場となるかも知れないのであ

る。しかも今次の戦ひは長期戦である反面建設戦の要素を有つてゐるのである。この戦ひに頑張るには、間に合せの考へでは駄目で、第一は前述のやうに周到な計畫が必要である。第二には焦らず撓まず努力する熱情が大切であり、第三には、力を辨へて方法を定める、即ち用意することが必要である。

米英アングロサクソン民族が嘗て世界の四分の一を占據した上そこに長期建設をやつたといふ力の根源には、圖太い國民性だけでなしに、『長期』に處する方法を辨へてゐたことを看過してはならぬと思ふ。彼等は頑張るだけでなしに、その進む途と、目的實現のための手段方法をしつかりと練り上げてゐた。前途を見極めそれに備へると云ふ周到な用意は、國民の日常生活の上にも欲しいものだと思ふ。敵機空襲の危険に曝されてゐながら、それに對する日常の用意が物心兩面に亘

つて整はず、當局の督促でやつと防空壕を掘らうと云ふが如きことでは、戦ひに對する十分の用意が出来てゐるとは申せないと思ふ。

また戦争の長期化と云ふことが判つてをりながら、眞劍になつて戦時生活を創造工夫して行くべきにも拘らず、いつまでも以前の夢を追つて、或はそれに執着して徹底した生活の轉換が出来ない、即ち進んで困苦缺乏に突入し、それに耐へ、必勝の日まで頑張ると云ふ用意をなさないと云ふやうなことでは、戦ふ國民の眞劍な態度とは申されないと考へる。この點故山本元帥に學ぶべき點が多いやうに思ふ。

3、「白聖館との盟」の遺志を繼げ

故元帥の「日米開戦に至らば我が目ざすところ、素よりグラム、比律賓にあらず、將又布哇、桑港にあらず、實に華府街頭、白聖館との盟ならざ

るべからず」との所信こそは、烈々たる大文字である。この書翰は大東亞戦勃發後新聞に發表せられ、直ちに敵國に翻譯報道され、敵國民を震駭せしめたと傳へられるが、この元帥の信念こそは大東亞戦の終結點を示すものであると考へる。

執拗飽くなき敵國の非望を破摧せんがためには、中途半端な行動では不可能であり、敵を追ひつめ、最後に敵國に進撃して、敵國首都に日章旗を掲げなければならぬ。全國民は故元帥の烈々たる遺志を繼いで敢闘しなければならぬと考へる。敵國首脳部は、前述のやうに日本を地球上より抹殺すると呼號し、本腰となつて、長期戦の構へをなし、ルーズヴェルト・チャーチル會談に於いては、日本が無條件降伏するに非ざれば、斷じて矛を收めぬなどと豪語して、戦勝後の世界經營などと稱する謀略宣傳を行つてゐるのであるが、日本國民は敵國民の強腰や、虚勢

に氣劣るやうなことなく、確りと腰を据ゑて、故山本元帥座右の銘『常在戰場』に徹し、すべてのものを捧げて御奉公し、一億火の玉となつて敵の反攻をがっちり撥ね返さなければならぬと思ふ。則ち生産を増強し、一發でも多くの弾丸、一機でも多くの飛行機、一隻でも多くの艦船を前線に補充するために、全力を盡して努力することである。かくして敵の必死の反攻を破摧することになれば、敵は愕然として我に返り、元來戦争目的の曖昧なる敵國民は收拾し得ない混亂に陥るであらうと思ふ。その時こそ故元帥のなさんとした大追撃戦に移り、敵の本土へ殺到し、最後の鐵槌を加へなければならぬ。白聖館との盟は夢想ではない。青少年諸君は、元帥に續いて、その遺志を繼いで學國總進軍の先登に立つべきである。

明察果斷・率先垂範

故山本元帥は明察果斷の人であつた。靜かに想ふに、あの曇りなき透徹した頭腦は、恰も明鏡止水の如しとでも云ふべきか。而して正しくこの處なりと見極めては、間髪を容れざる俊敏さを以て、しかも大勇猛心を奮ひ、敢然としてこれを斷行するや、山河盡く震ふの概ありとて、も形容したいほどであつた。大東亞戰鬪頭に於ける、かの眞珠灣攻撃の如きは正にその實證なりと見るべきであらう。

眞珠灣強襲は元帥の發案であり、元帥は、『絶對これで行け、若し支障あらば、自分が航空戦隊を引きつれて行く』と斷々乎として云ひ放たれたとのことである。眞珠灣強襲こそは世界海戦戦術を一變せしめ

た不滅の金字塔であり、海鷲の體當り戦法がこゝに成果を結び、過去廿年に亘つて華府、ロンドン兩條約以降皇國海軍が隱忍に隱忍を重ねた對米英比率の劣勢を一舉に消し飛ばしてしまつた空前の壯舉であつた。この神謀奇策によつて皇國の戰略的優位を確保したと云つても過言ではないであらう。

元帥は後輩に對して常に、『人はみなそれ／＼與へられた天職がある。職分を如何に巧みに處理するかによつて、その人の値打がきまる。何事に直面しても工夫し啓發して行く心掛が必要である』と云はれてをうたと聞くが、この元帥の日常の工夫啓發が、凝つては明察となり、出でては周到なる用意となり、發しては電光石火の果斷實行となつたものと思はれる。

元帥は部下を掌握するに妙を得て居つた。則ち上長として確りと

要點を擷んでをり、部下に對してはつまらぬ干涉壓迫、又は冷眼視するやうなことは決してしなかつた。従つて常に餘裕綽々たるものがあり、部下は欣々然として、各々その事に勵み居つたのである。訓練等の場合は嚴格そのものであつたが、その他については部下に對して難きを強ひなかつた。この事は元帥が一將校に與へた次の書翰にもよく現れてをる(これは某雜誌上に或る人が發表せられたものを、そのまゝこゝに引用する)。

貴書拜見致候、原隊に復歸隊務に御精勵の段奉賀の至に御座候。

はじめて活社會の一端に觸れられ、從來の境遇に一大變化を生じたりとの御所感、尤と存候。小生もとよりなほ修養の道程にあり、人に教ゆるの域には甚だ遠きもの有之候得共御質問に對し一筆御返事申上候。

一、酒。小生自身は天性酒を好まざるも、酒席に連なるに何の苦痛も
わだかまりも無之、亂酒の癖なき者は飲酒差支なし。たゞ酒席で
公務を論ずるは快なるべきも、慎まざるべからず、苦々しき限り也。
國を誤るの基也。

一、煙草。問題にあらず、何れにても可と存候。小生は事變後『蔣介
石没落迄中止』を誓ひ今日までやめ居候。夫迄はチェリー等三
十本位嗜用せり。

一、女。小生霞浦航空隊教頭時代(註：大佐)學生に話せし事あり、如次。
『女の子からチャホヤされたりして有頂天になる様な人間では、と
ても天下の大事を託するに足らず、考へよ』

右は小生が當然と思ふ事を一寸述べたる丈けなるが、かゝる訓示は
あまりやらぬものと見え、當時の學生は今も此事を口にし來れり。

二、小生航空戦隊司令官時代に中少尉を集め左の話をせり。

『青年將校に貴ぶ處は、旺盛なる元氣、純眞なる氣魄、汲々たる研究向
上心なり。此等の美點あつてこそ、艦隊の意氣亦昂揚す。然るに
近來若手將校にして結婚を急ぐ傾向あるにあらずや。勿論家庭
等の事情等にて一般には云へず、特殊の境遇にあらざる者は、少く
とも高等科學生(大尉初年頃)を終り、所謂一人前になりてから結婚
するを適當と思考す。なほ一言す、飛行將校ことに戦闘機操縦者
はこの最上達點たる三十歳までは獨身たることを希望す。餘自
身は三十五歳にて結婚せしも、未だ遲きを悔いず』

右の一と二は女に對する小生の概念に候。御參考迄。

昭和十五年九月廿五日

山本 五十六

南昌に敵機を追突し散華せし南郷少佐は此の時小生の忠言を實行

し卅二歳まで獨身にて名戦闘機乗となりし一人也、可惜。

戦ひに勝つ要諦は、第一線將兵の善戰奮闘と共に、最高指揮官がよく大軍を率ゐて最も主要な一點に戦力を集中するところの指揮統率の妙がなければならぬことは、古今の鐵則であるが、この點故元帥はその明晰な頭腦による見透しと果斷によつて、敵の最も主要な一點に戦力を集中された。緒戦に於てあのやうな戦果を挙げ得たのも故なしとしないのである。

元帥は大東亞戦開始と共に各指揮官に、『本職と死を共にせよ』と訓示され、率先垂範されたといふ。この率先垂範は、皇國海軍の傳統精神である。日清戦役の黄海海戦に於いて伊東祐享司令長官の坐乗せる旗艦『松島』は、戦勝にも拘らず敵弾のため破損し、旗艦を『橋立』に移

さねばならなかつたやうな例は、この事をよく示してゐる。東郷元帥は嘗て、『海戦で勝を利するの極意は旗艦が常に先登にあつて艦隊を率ゐ、微細なる戦機を捉へて、これに應ずるの外にない。亂戦になれば、愈々旗艦は先登に進まねばならぬ。さうすれば必ず隨伴續行するものも出來、隊列も回復し、勝を得るに至る』と申されたが、皇國海軍軍人は常に率先垂範を以て終始してをる。

先年地方長官が聯合艦隊旗艦を視察した際、艦橋の司令長官指揮所を見て、『聯合艦隊司令長官ともいふべき掛替へのない大切な指揮官が、こんな危険なところで指揮されることはどうかと思ふ。もつと分厚い鋼鐵で造つた司令塔の内、指揮されることがよいではありませんか』と問ふたところ、故元帥は即座に、『最高指揮官は寸秒を争ふ迅速さで敵情を知る必要がある。敵發見の遅速は海戦の勝敗を決する。

敵情を知るや、旗下艦隊を即座に決戦隊形に展開せしめなければならぬ。敵に對し先制有利の隊形をとれば、司令長官は戦死しても、海戦は勝つのである。爾後の處置は參謀長その他幕僚がやつてくれる。最高指官の率先垂範は、この山本が發明したものでなくてもない。皇國海軍傳統の精神である』といふ意味を答へられたといふことであるが、この率先垂範こそは皇國海軍勝利の秘鑰の一つであると云へよう。

元帥は常に、『私の部下には優秀な參謀が限りなくあるから、私が死んでも心配はない』と云はれてをつたと云ふが、元帥が最前線指揮のため飛行機を以て自ら危険に突入されたことは、元帥にすれば、身を以て率先垂範する平常行爲であり、自らは死の瞬間まで恐らく死と云ふが如きことは念頭になかつたものと推察せられるのである。聯合艦

隊司令長官ともある重責の身を以て、飛行機に乗つて戦場の空を飛ばれるやうなことは避けられないものであつたらうかと痛惜する人もあるが、皇國の聯合艦隊司令長官は、旗艦上のみ在るのではない。時としては飛行機上に在ることもあるのである。司令長官自ら身を最大の危険に曝らしつゝ、率先垂範する覺悟があればこそ、海軍の輝く勝利があるのだと云へる。従つて司令長官は心身ともに、非常な激務である。昭和十四年に聯合艦隊司令長官に就任せられてから數年、しかも大東亞戦へ突入し、海上に在つて日夜精魂を傾けられつゝある元帥の上に想ひを馳せ、私は一番その健康上のことが心配になつた。特に本年三月頃は最も心配したのである。それかあらぬか、四月に入つて實にはつきりした元帥の夢を見た。何を云つたか忘れたが、今でも顔がはつきりする夢を見た。をかしいなと思つてゐた矢先、元帥の機

上戦死の報が齎されたのである。元帥の明察果斷、統率の妙、正に典型的な指揮官であつたと思ふ。

1、工夫し啓發する態度を持つて

人の世に處する上に於ては、何事によらず明察しなければならぬ。物の道理をよく考へなければならぬと思ふ。前述の如く故元帥が後輩に對して、『人には與へられた天職がある。職分を如何に巧みに處理するかによつて、その人の値打がきまる』と云はれた言葉は、まことに含蓄ある名言であると考へられる。『巧みに』と云ふ言葉は、表面をゴマ化して體裁をよくする、所謂要領よくやると云ふ意味ではなく、その仕事と眞劍に取組み、それを立派に成し遂げるといふことである。價値ある仕事をなすことである。それには自分の與へられた使命を

よく識り『まごころ』を以てそれに當る必要がある。元田永孚先生は幼學綱要の第十九に於て、『識明かなれば、善く斷ず、明識善斷は、大謀を決し、大事を定むる所以にして、天下復處し難きものなし。是れ亦理を窮め意を誠にするの至りなり』と述べられてをるが、この意味は、識ることの明らかな者は、善く謀り、正しく斷ずることが出来る、それ故に、大事といへども、天下に成し難きものはない、明察果斷は、誠心誠意知識を明らかにして、物の道理を究めた結果初めて心をまことにする結果得られるところのものである、といふのである。

明治天皇御製

かたしとて思ひたゆまばなにごとくも

なることあらじ人の世の中

如何なる困難な仕事を與へられても、眞劍になつてそれに打つかつ

て行くならば、解決出来ないものはない。故元帥が、『何事に直面しても工夫し啓發して行く心掛が必要だ』と教へられたのも、このことを指してゐる。樂をして儲けたいなどといふ精神からは、決して價値あるものは創造されない。それは自ら工夫し啓發するところなく、他人のものをたゞ眞似て、表面をゴマ化してやつて行くといふ考へであり、そこに『至誠』(まごころ)がないからである。この一事を以て國家へ御奉公するのだといふ『まごころ』を以て當るところに、工夫啓發が現れ、素晴らしい發明發見、或は價値あるものを生み出すことが出来る。

今次の世界大戦を見ても明らかなるが如く、戦ひは敵國を封鎖し、食糧や必需物資のみならず、戦争資材を海外より移入するのを妨害して、結局に於て、戦力を喪失せしめて勝利すべく、あらゆる方法が採られてをる。従つて、知識を外國に求める範圍も極く限られて来る。何とし

ても、自力を思ふ存分に發揮して、敵國の意圖を破摧することに努力しなければならぬ。大東亞戰こそは武力・經濟學問・文化等々の各方面に亘つて大和民族が、本質的にどれだけの創造的素質を有つてゐるかの一大試煉であると思ふ。

今より廿數年前、世界の大國を向うに廻し四方敵に取圍まれたドイツが、乏しい資源を以て四ヶ年も戦ふことが出来たといふ眞因は、發明の力、創造の賜物であつたと思ふ。例へば科學者ハーバーが空中窒素固定法の發明で火藥の國産を完成し、之によつて少くとも二年間戦を延すことが出来たと傳へられるが如き例がそれである。現在日本に於ても各種の國産品が次々と現れてゐる。人造皮革や合成化學製品なども成功に近い。國産飛行機が太平洋に所狭しとばかり雄飛し、敵を壓倒してゐる。その他各種の兵器にも優秀なものが次々に現れて

ある。しかし頭腦より生み出すものは無際限であり、これでよいと云ふ限度はないのである。我方が優秀なるものを生み出すと同様に、敵側も、それ／＼智能を絞つてゐるのであるから、戦ひに勝つが爲には全力を擧げて、あらゆる面に亘つて、その智能が動員されねばならぬ。

敵國の情報によると、敵米は、單に量の増大に狂奔するのみならず、最近は質の點にも大いに努力を拂ひ、アインシュタイン博士などの科學者を總動員して、科學兵器の充實に乗り出してゐると傳へられてゐる。かくの如き敵を向うにして戦つてゐるのであるから、我方としても、これに負けないやうあらゆる人智を動員し、科學陣を動員し、優秀なる精神力に加ふるに、量の確保充實を以てして、仇敵を撃滅しなければならぬと存ずる。彼我航空決戦において、日本軍は四對一乃至五對一の優勢を保持してゐることは、世界に比類なき日本精神、猛訓練による體

當り戦法が質的に敵を壓倒してゐる證左であるが、更にこれに量を加へることによつて鬼に金棒となる。この點一億國民の總努力が要請される所以と考へる。物資は時として制約を受けることがあらうが、頭腦は無限である。その内容は人によつて大小はあらうが、各々工夫し啓發し合つて、新しいもの、價值あるものを生み出すことに精出せば、堂々とした時局を突破出來ると確信するものである。特に青少年諸君は、この工夫し啓發せよといふ故元帥の教訓を確りと身につけて、國家への御奉公に専念し、如何なる職分に在つても、それを立派に仕遂げるやうな心掛が大切であると考へる。

2、不言實行の習性を養へ

故元帥が正しくこの處なりと見極めたものに對しては、則ち熟慮し

て得た結論は、斷乎として實行に移されたといふ點は、國民就中青少年諸君の大いに學ぶべきところであり、特に將來人の先登に立つて御奉公せんと心掛けるならば、この事は最も大切なことであると信ずる。由來日本國民は、不言實行を尙ぶ習性を有つてゐる。「言擧げせじ」と云ふやうなことも、そんな所から來てゐる。しかしその不言實行と云ふことは、獨善的に行動し、我武者羅に行動する意味ではない。「私心」を去り、「まごころ」の下、一點曇りなき公明正大の心境の下にまづ熟慮し、正しき自信を得て、それを實行に移す意味である。理論のための理論、修飾・糊塗のための雄辯は、日本國民の採らぬところであらなければならぬ。不言でなく有言であつても、善を云ひ、或は眞を云ふ以上は、必然これを『行』の上に持つて行かねばならぬ。もし、實踐しないものならば、それらの有言も一切無價値に等しい。

戦時にあつては、平時の何倍もの速度をもつて、色々な問題を處理して行かなければならない。それは、上は國家の問題から、下は國民の日常生活まで共通する問題である。日々の問題を迅速適切に處置する、テキパキと片づけて行くことは、戦時に處する國民の心構への根本でなければならぬと思ふ。この心構へと習性を養つて置くならば、如何なる非常事態に遭つても、あわてず、焦らず、それを乗り切つて、混亂を未然に防ぐことが出来る。熟慮して自信を得たが、扱てそれを實行する段になつて、二の足を踏むやうな態度では、何事も出来ない。維新の傑物勝海舟は、「毀譽褒貶に關せず自信する所を斷行する人ならば、大惡大奸と評せらるゝとも我はその人に與せん」と云つた。自信を以て斷行するの熱意は、人を動かさずにはおかない。

3、率先垂範の眞義

故元帥が部下に對するに、詰らぬ干渉、壓迫や冷眼視することがなかつたと云ふ點も、人の先登に立つやうな人々の生きた教訓であると考へられる。何事も自分がやらねば氣が濟まぬやうな態度で、出る場所でない所に出たり、或は一々干渉がましいことを云つて、部下に臨むと云ふ人があるが、それは相手を信頼しようとする態度ではない。相互信頼感といふものは、こゝには湧かない。従つて各自が大いに自性を發揮し、能率を上げようとする意欲も減殺されてしまふ。或る程度相手を信頼し、そして任せるといふ雅量といふものが監督指導的地位にある人々に欲しいと思ふ。このことは部下に一切任せ切りで放任し、自分は安樂椅子に伸びくとしてゐると云ふ意味ではない。大きな

所は締めて、小さな細かい所は任せよと云ふ意味である。

世には陣頭指揮と云ふ言葉を履き違へ、或は名譽心等のために、當然部下の爲すべきことを自ら實行して得々たる人がある。海軍で例へて云へば、司令長官は司令長官の職務、艦長は艦長の職務、分隊長は分隊長の職務を全精魂を傾けて遂行すれば、それが則ち率先垂範、所謂陣頭指揮であるので、艦長が部下、士官又は下士官兵に混つてそれらの職務を共同遂行したからと云つて、それが率先垂範でもなければ、陣頭指揮でもないのである。もしそんな事になるならば、軍艦を動かすことも、艦隊行動も出来なくなつてしまふ。人には、それ／＼與へられた仕事がある。それを眞剣に遂行することが、率先垂範であり、陣頭指揮であると思ふ。掛聲やゼスチャーだけでは、人を動かすことは出来ぬ。

故元帥が出陣に際して、『本職と死を共にせよ』と訓示され聯合艦

隊司令長官としての職責遂行に死を賭して率先垂範されたが、これが眞の陣頭指揮の姿である。指導の地位にある人は、國民を指導するのだと云ふやうな考へて、あゝせよ、かうせよとたゞ命令的に指令したのでは、眞に人を動かすことは出来ない。指導するのだなどといふ思ひ上つた考へは棄て、國民と共に、その與へられた職責に全力を傾注し、國民と眞に苦樂を俱にするといふ眞剣な態度の中に、自然と人を動かす『まごころ』が発露され、指導などと殊更云はずとも、人を心から動かすことが出来るやうになるのだと思ふ。『本職と死を共にせよ』この最高の至誠に部下は感奮興起し、一絲紊れず、目的を達成し得るのである。以上は主として人の上に立つと云ふ人々の心構へであるが、垂範を待つ迄もなく、自發的に自己の職責を全うするの心掛が、誰にも必要なことだと考へる。誰かやるだらうと云ふやうな態度で、引込み思案を

なし、進んで困難に當る氣概がないやうでは、何事もなし得ない。あゝせよ、かうせよと、云はれなければ何もやらぬと云ふ消極的な態度では、戦争協力は出来ない。指示されなくとも、かうあるべきであると考へたならば、率先して實行に移し、努力すべきである。その眞剣さは人を動かす、周囲を動かす、懸ては一家一村一町、或は職域の全體の氣風となつて現れるのである。かゝる人が眞の率先垂範者と云へる。

自發的行爲ほど尊いものはない。特にこれからの青少年諸君に望みたいのは、今までの青少年諸君のやうに一から十まで『べからず』を云はれなければ氣が済まぬと云ふ消極性を改めて、自發的に善いことは率先して實行し、自己修養を積むといふやうにありたいことである。

逞しき膽ツ玉

故山本元帥は逞しき膽ツ玉の持主であり、殆ど恐怖心なしと申してもよいほどであつた。従つて事に臨みては、常に從容として微動だにしなかつたのである。かやうなことは、前述した『常在戰場』の平常の修養の然らしむるところであらうが、一面から見れば、先天的な所があつたのではないかと思はれる。普通の人には自動車に乗つて七十斤から八十斤の速度では平氣であるが、百斤となると恐怖心を起す。また船では廿四ノット以上は氣味が悪い。噴火口などでは一メートル近くまでは進み得るが、突端に臨むと、殆ど手足が固くなり、恐怖心を起す軍艦のマスト登りなども、初めは手や足が固くなつて恐怖心が起るのが普通であるが、故元帥にあつてはかゝる恐怖感はなく、マスト登りなど、多年熟練した水兵などと少しも變りなく平氣で登つて居つた。

故元帥の下つ腹を押した人は、誰でも驚いたことであるが、幾ら押し

ても空氣一杯のゴム毬の如くに凹まない。寧ろ撥ね返すほど固かつた。これは本人が態と下つ腹に力を入れる譯でなく、通常と變らぬ状態にあつて、さうであつた。よく云はれる氣海丹田と云ふのがこの形である。坐禪などをする人の意見を聴くと、普通人は呼吸を胸でやる。胸で呼吸する人は、意識が上部に集中し、神経も他の力も上部に集められるので、横隔膜が上にあがつて、肺臓や心臓を壓迫する。心臓が壓迫されると苦しくなり、物に感じ易くなり、神経が細くなる。所謂神経質で感傷的となり、疲れ易くなる。従つて大計畫が出来ず、決斷の勇氣に缺け、實行不能に陥る。然るに腹、就中臍の下の下腹で呼吸をすると、横隔膜が下り、胸の方は廣くゆつたりする。胃も腸も正座について、位置が正しくなる。下腹部に氣を入れて呼吸をするから、下腹部が充實する。力と氣がこゝに籠ると、上についてゐた重心が腰にさがり、膽力

が据り威力が出て、氣力が強大になり、大事業を成し遂げることが出来ることと云ふことであるが、故元帥の下つ腹が固かつたといふことは、この道理によつて、そこに絶倫の精力、逞しき膽ツ玉が蓄積されてゐたのではないかとも考へられる。

『元帥と禪』と云ふことについて、或る人が、故元帥がロンドン會議から歸朝した直後、郷土長岡の賢正寺に於いて、住職禪巖師との禪問答をした場面を記述されてゐるのを興味深く拜見した。その記述の一節に、『故元帥と禪巖師は、初めて紹介されたにも拘らず、兩者は相對坐したまゝ、暫くはたゞ黙々沼の底のやうに寂靜の中に、時折燈火の影がゆらぐばかりである。やがて禪巖師は“まだ、まだ”と喝した。元帥もそれに應ずるが如く、獨りてに口を衝いて出たものは同じく、“まだ、まだ”の二語であつた。そこで二人は顔を見合せて初めて呵々大笑した』

とあるが、故元帥の下つ腹が固かつたこと、殆ど恐怖心の持ち合せがなかつたと云ふことを思ひ合せ、故元帥は殊更坐禪などの修業をしなくとも、既に禪道悟入と同じ境地にあつたのではなからうかと思はれる。

1、神経の太さは戦時下特に必要

今次大戦に於いては『神経戦』と云ふ新語が生れたことは、周知の通りであると思ふ。爆撃や宣傳謀略、さういつたあらゆる手段に訴へて敵國民の神経を攪亂せしめ、神経衰弱状態に陥れ、正常の思惟を喪はせ、敗戦思想や厭戦思想などを誘發せしめ、敵國の國民を動搖混亂に陥れて、武器によらず相手を屈服せしめると云ふ遣り方である。これは今次大戦に初めて登場したものである。前大戦にもこの戦法は採用され、ドイツの如きは、イギリスの宣傳謀略によつて、敗北したとまで云

はれたほどである。

戦時下に於ては、兎角人の神経は過敏になり勝ちであり、現在に於ても、人の氣持ちは何んとなくいら／＼してゐるが如く感ぜられる。この神経過敏が充じて來ると、詰らぬことをも、喧ましく騒ぎ立てるやうになる。戦局が華々しい戦果の連続と云ふ時は有頂天になるが、熾烈な決戦期になると、その一進一退に一喜一憂して仕事も手につかぬといふやうな人がその病に罹つてゐるのである。

戦場に行くことより、日常の仕事を立派になすことが、前線で戦ふことと同じだと云ふことを忘れて、銃を執つた事もないのに、自ら戦場に立つて戦ひたいと云ふが如き焦躁に驅られるといふ人は、神経過敏になつて脚下を忘れ放心状態に陥つたものであつて、敵の神経戦に引つかゝる人であると思ふ。さう云つたからとて、勿論前線に無關心であ

れと云ふのではない。またズボラで横着であれと云ふことでもない。前戦の死闘を自らの死闘と考へて、日常を死身になつて働くことである。その與へられた職責を遂行することである。そのためには神経の太さ、則ち故元帥の如き膽ツ玉に近いものを、國民各自が持つやうにして欲しいと思ふ。「常在戰場」の精神を以て、敵の神経戦的な企圖を未然に粉碎し、仇敵必滅を期さねばならぬ。

温威並び行ふ

故山本元帥は重々しく、何處となく犯すべからざる威嚴があつた。平常はムツツリして恐ろしいやうな印象を與へるが、少しも偉ぶるところがなく、何とも云へない親しみが湧く。これは故元帥の嘗ての部

下が口を揃へて述べるところである。親しみを感じるが、狙れることの出来ない威厳があつた。元帥は嘗て叔父に當る野村貞少將のことを鈴木貫太郎大將を訪ねて訊き、『鈴木大將が野村將軍の性格を「剛毅磊落、親しみ易く狙れ難し」と云はれし處に無限の味あるを感ず』と記してをられたとのことであるが、故元帥の性格も、野村提督の性格と共通したものがあつた。『親しみ易く狙れ難し』と云ふ風格があつたと思ふ。

この犯すべからざる反面に愛情のこまやかなるものがあり、部下への思ひ遣りは、一入深かつた。ずつと以前の話であるが、乗艦が某港へ寄港した時のこと、某將校が妻に約束した某港名産の草履を買ふことが出来なかつたと、如何にも残念さうに話すのを聞いた故元帥は、『君は孝行だなア……』と笑はれた。するとその夜、その將校の室へ小さ

な包みが投げ込まれた。何かと手に取つて見ると、それは晝間買ひそこねた草履であつた。そこで初めて故元帥が投げ入れられたのだと判り、その思ひ遣りの深さに感泣したといふことである。

猛訓練などは至極嚴格に行ふために、一時部下の者でも、餘り残酷だと云ふやうな考へを持つ事があるが、その温情と心からなる部下思ひには、いつしかかゝる不満は解消し、この司令官の爲ならば火の中、水の中、中でも飛び込むといふ心境に變つたと云ふことを聞いてをる。部下の犠牲者に對しては、全く我が子の死以上に悲しみ、自分の手帳に犠牲者の姓名、忌日を書き込み、暇のある毎にこれを出して靜かに瞑目追懷したと傳へられる。霞浦航空隊教頭及び副長時代、猛訓練の犠牲者を祭るため、自ら委員長となり、霞浦航空神社を創建された。支那事變に於て南郷・間瀬の二人と並んで海鷲の三羽鳥と云はれた白相大尉自

爆の発表があつた際の如きは、故元帥はその発表を聞きながら、人目も忘れて滂沱たる涙を拭ひもせず、一言も發せず室を立ち去つたと、當時居合せた新聞記者が追懐してをる。また大東亞戰の特別攻撃隊の眞珠灣奇襲の壯舉を聞いた時、元帥は深い感激に暫くは頬に傳はる熱涙を拭はうともせず合掌さへされたと、海軍報道班員は報道してをる。そして知友に宛てて、『今の若い者などと假りそめにも云へぬ。若い者の方が我々より立派な仕事をやつてゐる』と感激の手紙を寄せられたことは、前述べた通りである。故元帥は九軍神を讃へ次の二首を詠んでをられる。

比なき勳をたてし若人は

とはにかへらずわが胸いたむ

益良雄の行くてふ道をゆききはめ

わが若人らつひにかへらず

側々として部下を思ふの至情が溢れ出てをる。故元帥の前線に於ける日常についてはあまり知ることには出来なかつたが、軍報道班員などの報道するところによると、こゝにも部下思ひの幾多の事行があり、傷病將士を見舞はれる時などは、扉を開けると、『御苦勞さま』と頭を下げ、一人々々見舞ひの言葉をかけ、院長にそつと病狀を尋ねて、全快見込みがあると聞くと、我が事のやうに『よかつた』『よかつた』と云つて喜ばれてをつたといふ。

前線基地にあつて大編隊の海鷲が飛び出す時などは、長い時間がかかるが、砂塵の中に立つてそれを見送り、故障機などがあると傍を離れず見守り、飛び立つて見えなくなるまで帽子を振つて見送られ、また物凄イスコールの時でも悪路泥濘を冒して、わざわざ航空隊の出動を見

送りに行かれたと云はれる。このやうに、故元帥は温威並び行ふといふか、誠に、徳望の高い人であり、部下は長官を慈父の如く思つてをつた。親鸞として、子鸞をして克く笑を含んで死地に就かしめ得たのも故なしとしないのである。

1、男子の本領は畏敬せらるゝにあり

昔の武士は、無暗に笑ふことは男子の恥であると思はれた。笑ふ氣持で人に接する態度もよい。世間に微笑が湛へられることは望ましいに違ひないが、男子の本領は畏敬せられるにあると思ふ。則ち故元帥の如く、親しみ易く狃れ難いと云ふ性格は、男子としては大いに學ぶべき點であり、かくするには中々むづかしい事ではあるが、それを念じて努力するやうにしたいものだ。笑ふならば、戦ひの後に、勝利の後

に、腹の底から天地を揺り動かす位の大聲で笑ふ。最後に笑ふものが本當に値打のある笑ひを笑ひ得る人であると思ふ。

威嚴と云ふものを、たゞ職權を笠に着て威張り散らすことだと考へてゐる人があるかも知れぬが、かゝる所には威嚴はない。自分が偉いからかくゝの地位に在り得るのだ、故に威張つて威嚴を作らねばならぬと云ふやうな考への下では、人をして眞に畏敬せしめ得ない。自分の職分・職權、それに隨伴する力と云ふものは、自分一個の偉さによるものではなく、陛下の御信任の下にのみあり、陛下の御光によつて自らも光るのであると云ふ臣道觀に徹し、自分の言動が『大御心』に對し奉り外れてゐるやうなことはないかと日々刻々反省し、謙虚な心を以て御奉公する。國民の上に位するものではなく、國民と同じ臣民道實踐といふ水準にあつて、御奉公の先登に立つてゐるのだといふ自覺

の下に、人に對すると云ふよりは、自ら率先垂範、後に續く人の側に立つて、細かいところまで考へてやるだけの用意が必要であると思ふ。所謂思ひ遣りが必要だ。この思ひ遣りは、御奉公の『まごころ』から出る。この『まごころ』が人々の『まごころ』と共感し合ひ、一如し、一つ心になつて、その使命達成をなし得ることになる。『べからず』よりは『かくあるべし』と垂範し、溫威合せ行ふ、そこに威嚴が現れる。たゞ威張り散らすだけでは人の眞心を打つことは出来ない。この點故元帥に學ぶべき所が多いと思ふ。即ち御奉公專一に、嚴格に與へられた任務を遂行する反面に、その任務遂行に協力する人々の細かい所まで、思ひを致す必要がある。『威嚴』『畏敬』の下には強制の感じはない。要するに『私心』がなく『まごころ』を以てすることによつて人をして畏敬せしめ得るのだと考へる。

公私分明・禮節を重んず

故元帥は、公私を明らかにし、又禮節を重んぜられた。軍縮會議に臨んだ當時は、家人に緘口令を布き、新聞や雑誌記者が來ても、強く談話などは謝絶し、女子供の寫眞は絶対に應じてはいけなと固く云ひ置かれたとのこと。この事は聯合艦隊司令長官として海上に出られてからも、同じであつたと云はれてゐるが、これは公私混同を防がんとする元帥の日常の心構へを端的に示されてゐる。また海軍次官當時、知友との面會は、役所ではせず、水交社において面接したといふやうなことも、その一例であると思ふ。

海軍次官在職中約三ヶ年間、大臣室に於て私と公事を談ずる際は、常

に起立して嚴肅なる態度を持してをられ、幾度か椅子をすゝめでも、嘗て腰をおろしたことはなかつたのである。さらばとて別段窮屈な様子などは見えなかつた。私用の時は別であるが、公用の時は必ず、かうであつた。こちらがきまり悪くなるほどであつた。それほど上に對しての禮儀と云ふ事を嚴格に守つてをられた。これもなか／＼一朝一夕に出來ないこととて、矢張り深く修養してをつた結果であると思ふ。海軍航空本部の上出中佐が語つたのを新聞で見たのであるが、『或る時、艦内で士官に對する進級會議が開かれた。その前夜副官が進級に關する書類を渡した時、故元帥は幕僚を相手に將棋の最中で、それが深更まで續けられてゐたこととて、翌早朝からの會議には、恐らくざつと目を通す位で出席されるだらう位に思つてゐたところ、會議となると、故元帥は一人々々の士官の成績について、これ／＼についてはかく

書いてあつたではないかと、一々指摘すると云つた調子で、何もかも心得てをられた。恐らく元帥は、將棋が終つてから直ぐには就寢せず、書類を精しく通覽されたものと思はれる』と語つてをる。故元帥にあつては如何なる場合にも、私の事て公の事をおろそかにするが如き事は微塵もなかつた。

故元帥は非常に禮儀正しい人で、身だしなみと云ふか、その服裝といひ、姿勢態度と云ひ、常にきちんとして居り、しかも堅苦しきところがなく、威風堂々たるものがあつたことは、あらゆる故元帥の寫眞に能く現れてゐる通りである。海軍大學校、學生時代に下宿して居られた東京築地四丁目敬覺寺の現住職賢昇師の語つたのを新聞で見たのであるが、當時中學生であつた賢昇師が、故元帥にお辭儀をするときちんと姿勢を正して、正式に敬禮を返されたといふ。元帥にあつては、目上とか

目下とかの差別は一切されず、嚴格に禮儀を守られた。長い演習が終つて軍港その他の休養地に入ると、不眠不休で活動したにも拘らず、地方長官や地元の人々が訪問して來ると、少しも疲れた顔もせず、これを迎へるばかりでなく、すぐその答訪に出かけて行かれたと云はれる。

手紙に對しては如何なる多忙の中でも、必ず返辭を書かれた。それは何百通でも自ら筆で書き、短きものには短いなりに、長文には長文の返辭を出されるのを常とされた。先年元帥の郷土長岡の師範學校生徒が百名ほどで慰問文を出したのに對し、長文の禮狀が送られ、連名の百人もの名前を一々丁寧に書いてあつたといふ事を新聞で見たのであるが、私などは忙しい時にあまり手紙をやつて返辭を書く時間を費やさせるやうなことがあつては悪いと思ひ、いつも簡単に書いてやつた。少し長いものには『返辭無用』返辭は御遠慮すると付け加へてや

つたほどである。

元帥はまた報恩の念に厚い人であつた。軍縮會議から歸つて、母校坂ノ上小學校で講演された時、壇上に立つた元帥は、しばし瞑目した後、劈頭昔の恩師十名の名を呼び、『先生御蔭様で五十六は無事任務を果して歸りました』と報告したといふことを、或る人が書いてをられるのを拜見した。またこの講演が終つて記念撮影をする際、故元帥を中央に迎へようとしたところ、『これでは席順が違ひます。學校で一番偉いのは先生です』と、中央の席は讓つて掛けられなかつたと云ふことである。またこれも新聞を通じて知つたのであるが、故元帥が海軍大學在學中のこと、恩師の小學校の先生が貧苦の中にあつて、その子の教育費に困られてゐることを聞き知つて、月十二圓づつ送られたといふことである。海大在學中に月十二圓づつ他人の子供に出してやる

といふ事は、なかく普通の人には出来ないことであるが、それを元帥が續けて行かれたといふことは、強烈な師恩に對する報恩感謝の真心の發露であると考へられる。

1、禮は天地自然の秩序・人事の規範

故元帥が禮儀を嚴格に守られたといふことは、大いに學ぶべき點である。考へられる。往々にして人は、狃れて來ると、場所柄も何も忘れて態度を崩し、越えてはならない一線を越えて禮を無視し勝ちであるが、禮は天地自然の秩序であつて、社會人事の規範となるものであり、これを持することによつて天地自然の秩序が整ひ、人々は陸ひ合つて、家は齊ひ國が治まるのである。もし一日でもこれを缺くやうなことがあると、人々は放縱に流れ、争鬭や犯亂が熄まなくなり、秩序は全く紊れ、

忽ち野蠻になつてしまふ。お互ひに共敬謙遜し合つて、その起居振舞が禮儀にかなつてこそ、初めて秩序と云ふものは成り立つのである。禮の紊れは秩序の紊れとして、軍隊にあつては特に嚴格に敬禮を行ふ所にもこゝにある。

軍隊で敬禮すると同じやうに、日本人同志は目と目を合せて頭を下げ、兩者の空間は禮の心で滿されるやうな、温かみが欲しいものと思ふ。農村や地方の小さな町になると、その村や町の人々はお互ひに話しかけ、挨拶し合ひ、非常に温かみを感じるのであるが、都會になると家を一步出れば、赤の他人だと云ふ感じが強い。最近では隣組などが出來て、隣近所はお互ひに日常の挨拶をするやうになつたが、昔は隣近所に誰が居るかも判らず、無論挨拶をしようなどと云ふ人は稀であつた。今日でも隣近所から一步出れば、赤の他人であると云ふ感じは昔と變りは

ない。顔の知らぬ人に對しては禮も何もありません。他人を押しつけても進まうとし、競争し敵視する。そこに濫かみと云ふものがない。これは自由競争と云ふ無秩序の罪でもあるが、『同胞相愛』、お互ひが日本人同志だといふ考への下に、共敬謙遜し合ひ、譲り合ひ、禮を失せぬやうにありたいものだと思ふ。總力戦下の今日に於ては、いつ敵機空襲などによつて國內が戰場化さぬとも限らぬ。お互ひが赤の他人だと云ふやうな考への下にあるとすれば、秩序ある行動は出来なくなる。『常在戰場』、前線の將兵が一本の煙草を譲り合つて喫み合ふやうな心掛が、國內の社會生活の中にも欲しいと思ふ。

禮と云ふものは、さうしようと思はなくとも、自然の中に心の正しさは禮儀の正しさとして容に現れて来るものである。『心正しからざれば、禮正しからず』、『體正しからんと欲せばまづ心を養へ』と云

ふ古語があるが、軍隊にあつて敬禮の際における姿勢、眼のつけ所によつてお互ひの心を読み取ることが出来ると云ふのも、この道理によるのである。禮儀の正しさには、何よりも敬虔な精神、『まごころ』が必要である。長上に對する禮、先師への禮にしても、交通道德の問題にしても、そこから出發して初めて眞實のものとなる。

故元帥が禮儀を嚴格にされるとともに、服装や姿勢態度をきちんとされてをつたといふことについても、學ぶべき所が多い。昔の武士も、『身だしなみ』と云ふ點に留意した。おしやれてはない。禮は形として現れると云ふ點を重視したからに外ならぬ。戦時下に於ては色々な物資が不足し、衣類なども間に合せなければならぬ。最近夏季は上衣を取つても、長上に面會出来るといふ、所謂簡素生活運動などが起きてゐるが、こゝに注意しなければならぬのは、形の上の簡素化が、心の

中の簡素化になつてはならぬと云ふ點である。則ち衣類を簡略にする、或は間に合せてもよいが、禮儀と云ふものまで簡略化されるとなるに困る。服装は已むを得ないとしても、せめて姿勢態度なりとも飽くまで嚴正であつて欲しいと考へる。

故元帥の師に對する禮の如きも、特に青少年諸君の最良の教訓のやうに考へられる。一時に大勢劃一的に教育すると云ふ近代教育制度にもよるが、近年師に對する報恩の念が稀薄化してをる如く考へられるが、この傾向は大いに改めたいものと思ふ。報恩思想と云ふものは日本人として最も大切なもので、生れては父母の恩、さては師の恩、國恩、君恩を蒙らぬものはない。忘恩の精神からは、日本人の『まごころ』は出て來ない。報恩感謝の念から日本人獨特の事行が生れ出て來るのである。故に單に師恩のみならず、他の報恩にも常に心掛け、日々感謝

の生活を送るべく努むべきであると思へる。

故元帥の筆マメな點も、なか／＼眞似の出來ない所であるが、世に處する上に於ては大切なことであると思ふ。元帥が目上と云はず、目下と云はず、せつせと筆を運ばれたといふことは、『禮を失してはならぬ』といふ眞剣な態度に出發されたものと思はれるが、たとひ一本の手紙でも相手の受ける感じは非常に違ふ。如何に離れてをつつても『眞心』は通ずるのである。人と人との交際には手紙といふものも非常に重要な役割を果す。筆不精を後になつて詫びるよりも、筆マメにして『まごころ』から通信し合ふと云ふことが、相手の心を強く打つのである。青少年諸君の心すべきことではなからうかと思はれる。

故元帥の公私の別と云ふことも、官公吏のみの教訓ではなく、一般にも共通すると考へられる。勤務先に知友を呼び寄せ仕事最中に面談

したり、或は娛樂などに熱中し、片づけるべき仕事があつても、それを後廻しにして、事務停頓を來すが如き例無しとしない。かゝる公私混同は他に影響作用し、全般の能率低下となつて現れることになる。嚴に戒むべきことではないかと考へる。

忠 孝 一 如

盡忠に生きる人にして孝心の篤からざる人はない。國に殉ひて家を忘れた故元帥も、孝心極めて厚く、大尉時代嚴父が亡くなり、その同じ年に母堂も嚴父の後を追はれた。當時元帥は艦隊付として横須賀に居られたが、母堂重體の報に急遽郷里に歸つて夜も寝ずに付き通して看護に努め、茶筒でアイスクリームを拵へてそれを母堂の口へ匙で運

んで上げ、或はわざ／＼持參した大禮服を目の前で着て見せ、母堂を喜ばされた。これがため一時容體を持ち直したと云ふが、元帥が休暇が切れて歸還するや、母堂は再び悪くなり、永眠された。この事を或る人が思ひ出話の中で語つてをられたが、元帥は前述の如く公私の別を嚴格にされたが、右の時だけは一生の別れになるかも知れないと、母堂に喜んで貰ふためわざ／＼大禮服を持參したといふことは、まことにその孝心に出發するものであつて、大禮服を持參されたのは、これが最初にして最後であつたと聞く。

また故元帥は兄弟仲もよく、人も羨やむほどであつたと云はれる。たつた一人の令兄高野季八氏に對しては、海外駐劄や航海中も便りするのを日課とせられた。次官時代のこと、季八氏が持病の糠尿病で病床に臥してからは、忙しい公務の傍ら暇さへあれば必ず長距離電話で

容體を聞き合せ、主治醫が輸血の話をする。『では自分の血をやらう』と即座に決心し、その話をし長壽を祈られた。その甲斐なく他界されるや、生前亡兄が愛好したといふ生花數株を棺中に入れ、いつまでも泣かれたとも聞いてをる。その孝心篤きこと、兄弟愛の美しきことは、人をして感動せしめずにはおかない。

明朗濶達

故元帥は明朗濶達の人であり、常に曇りなき澄み切つた心境にあつた。心の中にわだかまりと云ふものがなかつた。小細工と見られるやうなことは大嫌ひであつた。これは元帥に私心と云ふものがなかつたからであると思ふ。私心がないから、従つて人と相和することが

出來たのだと考へる。『私心』と云ふものは『至誠』の反對的のものであつて、如何なる立場にある人を問はず『私心』の奴となるやうなことになる。心に曇りが出て陰險、小細工を弄し、偽善をやることになる。所謂心の許せない部類の人に入る。これに反して『私心』のない人は『終始一誠意』であり、『明朗濶達』心と心の交りが出來、人を感動せしめ尊敬せしめるやうな行爲が出来る。故元帥に學ぶべき所であらうと思ふ。

元帥は明朗濶達であると共に、一面無邪氣であり、奇抜な所があつた。この點は大尉時代から最近まで少しも變つてをらなかつた。砲術學校教官時代は私も悪戯が好きで、一緒になつて騒いで上官に叱られるやうなことも時々あつた。當時二人で手裏劍の稽古をしたことがある。段々上達すると小さな手裏劍では物足らなくなつて來て、短劍を

抜いて練習した。稽古にする的が必要なので、他の部屋から芥箱を擔ぎ出しそれを的に稽古をした。このため二つか三つ壞して叱られたことがあるのを記憶する。

元帥は酒はふだんは飲めないが、大勢して飲むと『何、俺だつて飲む』と、飲む時は相當やつた。負けることが嫌ひであつたのである。元帥の祕し藝は徳利を手の掌に吊すことであつて、これには誰も驚いてをつた。また酒席ではよく『おてこ押し』と云ふのをやつた。しかし元帥は一度も痛いとも、負けたとも云つたことがなく、その強情我慢にあきれた戦友は『石頭』と云つて驚いたものである。故元帥は決して自尊大に構へると云ふ風がなく、くだけた所があり、努めて相和すべく心掛けられた。演習後の休養地に於て幕僚達が一杯やらうとお膳立をすると、必ずその席に出席してニコ／＼と皆の話を聞いてをられ

たといふことを嘗ての部下の一人が語つてをる。

また愉快なこと、面白いことがあると、『昨日はこれ／＼で實に愉快だつた』と云つて笑つて喜ぶ様は、實に無邪氣で、子供が喜ぶ風なところがあつた。こんな調子なのでよく人に好かれてをつたが、しかしそれにも拘らず、決して人は元帥の前で狙れ／＼しい態度を採り得なかつた。こゝが偉い所であると思ふ。自ら偉らぶるでもなく、無邪氣奇抜な反面に、犯すべからざる威嚴を具有されたといふことは、要するに元帥には私心がなく、明鏡の如く心が澄み切つてゐたために、相手が心の奥底まで見透されるやうな感じを受けたせゐるではなからうかと思ふ。

1、明朗なる戦時生活

戦争が長びけば長びくほど、時局が世界的にむづかしくなればなるほど、人々の神経はいらくして来る。これは必勝を期する國民にとつては禁物である。如何なる事態の下にあつても、それを敢然として乗り切つて行くためには、明朗な戦時生活に徹する必要がある。それには、故元帥の如き明朗闊達さを、國民各自のものとしなければならぬ。私心のない、常に曇りなき澄み切つた心境に達することである。則ち『まごころ』を以て御奉公する、死をさへ微笑を以て迎へるのが日本男兒の心構へだといふ考へ方に徹する必要があるのではないかと思ふ。この覺悟さへ出来てをれば、如何なる困難に直面しても、閻魔のしかめ面をせず、明朗闊達に突破出来るはずだと考へる。

青少年諸君は國民の中で一番明朗にして快活な層に屬してゐるはずだが、戦時下の世間の激しい動きの影響を受けて、さうした一面を次

第に喪失しつゝあるかの如くに思はれる。努めてそれを失はないやうにし、その無邪氣さを以て、街に家庭に、廣く世間に明朗性を取戻すやうにして貰ひたいと思ふ。無暗矢鱈に騒ぎ廻るやうなことは、眞の明朗でもなければ、戦時下迷惑千萬なことでもある。明るい氣持、落ち着いた静けさの中に微笑を湛へる者こそ、眞に明朗な青年といふことが出来るのである。戦争を一時の變態的現象と見ず、これを常時と見て、明るくその中に没入する必要がある。

頑張り・負けじ魂

故元帥は非常に頑張りの強い人で、前述べたやうに、負けることが嫌ひであつた。日進艦上で負傷して後送された時、元帥の手は熟れた柿

のやうに赤黒く腫れ上り、軍醫は肩から切斷せねばならぬと宣告したが、元帥はこの腕を切り取られては今後御奉公が出来ないと頑張られ、大手術を遅らせ、不思議に快方に向つて、指二本に止めたといふことが傳へられてゐる。元帥の頑張りはあらゆる方面に現れてをつたやうに思ふ。華府會議に臨んだ時などは、多忙のため徹夜は珍らしくなく、『ガンバリなら誰にも負けない』と云はれたと云ふが、次官時代にも、支那事變を繞る各種の問題で相當頑張りを發揮した。この頑張りが艦隊訓練の上に現れたものが例の猛訓練である。

故元帥は勝負事が大好きで、特に將棋をやつた。こゝにも負けじ魂と頑張りが發揮され、長い時には三十時間もやつたといふ記録がある。勝負運は非常に強かつたやうに聞いてをる。勝負事にも戦略戦術が必要なことは云ふまでもない。故元帥は漫然たる遊戯としてこれに

熱中したのではなく、工夫啓發、修養の一端として勝つまで続けられ、それに徹底的な眞面目さを發揮した。

従つて故元帥は妥協嫌ひであつて、信ずることは遠慮なくズバ／＼云つてのけた。平素は極めて無口であるが、必要な場合は滔々と自説を主張する。自信に満ち自信が強い爲、時には随分ぶつきら棒に見られることもあつたが、強ひて自説を枉げて妥協したり、その場を繕ふやうなことは決してなかつた。元帥は卑怯が嫌ひで、正しい事はどこまでも押し通す剛毅の性格を有つてをられた。しかし私心がないから、一時腹を立てたやうな相手も、聽て元帥の眞意を諒解すると云つた状態であつた。元帥はこの頑張り負けじ魂と非妥協の態度を以て敵に對し、率先垂範せられたのである。

1、頑張りこそ必勝の道

勝利のためには頑張りとは負けじ魂と、妥協嫌ひが必要である。我々は元帥の垂範に續かねばならぬ。勝利の道は決して安易ではない。『斷じて敵を恐れず』とは何れの戦争に於ても必須の要諦であるが、また『濫りに評價を誤り敵を侮るべからず』と云ふことも完勝の秘訣でなければならぬ。前大戦に於てドイツ國民が戦意を喪失した原因については、世上色々に解釋されてをるやうに思ふが、敵の正當なる評價を誤つた事も大きな原因として擧げられてゐる。則ち當時のドイツの指導者は、敵國イギリスの無力無能を大いに宣傳し、國民の戦意を煽つた。そしてこの戦ひは年ならずして終るなどと云ふ妄想を國民に植ゑつけたのであつたが、イギリスはドイツの指導者が繰り返し

繰り返し教へた所のものよりも、遙かに強靱であつた。この幻想と現實の開きがあまりにも大きかつたといふ事實が、敵の彈丸よりも鋭くドイツ國民の頭腦を貫いて、遂に前後五年の苦闘にドイツ國民を躓かせてしまつたのである。

敵を倒すためには、まづ敵の正體を確りと認識して、自らを倒すべからざる地位にまで高める必要がある。先頃、敵米はその敗戦挽回の陣容建直しのために『日本研究』に必死となつてをると云ふことが傳へられたが、我々も敵國民の國民性を十分知つてそれに對處し、徒らに偏見のみを頼みとしての悲觀樂觀を排し、内に必勝不敗の體制を固めなければならぬと思ふ。

2、我々の敵は無類の頑張りを持つ

現在に於てアメリカ人全部をアングロサクソン民族とは云へないが、過去の歴史と傳統による不斷の感化によつて、全米人を一つの性格に陶冶し、アングロサクソンに改鑄することに成功してゐる。而して米英國人は多分に共通した性格を有つてゐる。ニュージランド十三州の植民地住民達が祖國に對して叛旗を翻した當時、彼等は僅か二百萬位の人口よりなかつたが、ワシントンは終始一貫、一萬二千位の小兵力を以て七年間戦ひ續け、あらゆる困苦缺乏に堪へて、遂にその目的を達した。またかの南北戦争も米人特有の強靱な性格を現した代表的なものであつた。

大東亞戰に於てマニラを失ひ、バタアン半島からコレヒドール島要塞に立籠り、飽くまで精強なる皇軍に抵抗したマッカーサー軍は、香港、シンガポールに於ける英軍とは面目を異にし、特にコレヒドールの如

きは既に勝敗の數が決定し、戦略的にもそれほど價值がないにも拘らず最後まで頑張り通し、我が方に高價な代償を支拂はせんとした態度の中に、彼等の粘り強さの一面が窺はれるのである。

敵米國は、未だ青年國であり、物質萬能の外に、その若さは一つの力となつてゐる。今迄敗戰の經驗を有たず、闘志が極めて旺盛である。それは前に述べたソロモン海戰以來、性懲りもなく手をかへ品をかへて繰り返してゐる反撃によつて見ても明らかである。しかもその物質依存の優越感は、一時戦況不利に直面しても、神経質にならぬ。ハワイの主力艦が全滅し、マニラが陥ち、空母が撃沈されたと云ふ敗報は愉快なことではあるまいが、こちらで想像するほど落膽しない。彼等は太平洋艦隊の主力がやられても、大西洋艦隊がある。空母が撃沈されても、新艦が出来ると樂觀的に考へるやうである。敗戦もこれを苦にし

なければ戰意は喪失しない。南北戦争の歴史は、この點について多くの示唆を與へてをる。

一方敵イギリス國民も、執拗さに於いては、アメリカ國民に劣らぬ所謂アングロサクソン獨特の粘り強さを有つてゐる。ナポレオンは戦争廿二年、モスコイ遠征まで行つたが、彼が最初から最後まで敵として戦つたものはロシアではなく、イギリスであつた。結局彼を屈服せしめたものもイギリスであつた。ヘンリー七世によつて造られた價格一萬四千磅の二重甲板船が初めてローヤル・ネーヴィを代表して以來、排水量三萬五千噸、速力卅節、主砲卅六種十門を有つ不沈艦プリンス・オブ・ウェールズが東亞に於て沈められる迄、イギリスと戦つたものは總べて敗れてをる。彼の不敗の原因は、海上制覇と不撓不屈の敢闘精神に在る。この海上制覇は大東亞緒戦に於て、我が精銳の一撃の下にそ

の力を喪つたとは云ふものの、その國民性たる粘り強さはまだ消失してゐない。この粘り強さは、一九三九年九月三日以來、敵が如何にドイツと戦つてゐるかに見ても明らかである。ダンケルクの敗戦以來、獨ソ戦の始まるまで、暗黒と絶望に充ちた時期に處して堪へてゐる。敵英は嘗てフランスと戦ひ約一世紀の間、戦争を繼續したといふ歴史を有つてゐる。クキン・エリザベスが、その勁敵であるインヴァインシブル・アルマダーを撃破するまで百卅年に亘るスペインとの苛烈な對抗を續け、オランダとの海上争覇の歴史は、アングロサクソン・イギリス人が如何に執拗頑強な民族であるかを示すものである。デューク・オブ・アールボロの野戦車が初めてルイ十四世のそれと、ブレンハイムの戰場に相見えた時、過去の勝利に酔つてをつたルイ十四世軍は、イギリス人がなほこれ以上に新しい戦争を開始するのかと云つて驚いたと云ふ。

前後廿三年に亘るナポレオン戦争の如きも、この民族性から云へば長
いと云へない。

敵イギリスの歴史が勝利から勝利へと歩いてゐるが、戦闘上に於て
は必ずしも強いとは云へない。南阿戦争當時、半開のポーア人と戦つ
て十中七八まで敗北し、敵將クルーケはジョンブル與し易しとまで云
つたほどであつたが、結果としては、この戦争にも勝利を得てをる。か
くの如く敵は幾度敗戦しても、絶對氣を落すことなく、倒れては起き、倒
れては起きして、相手が根負けするまで頑張る、粘る、といふ性格を有つ
てゐる。

我々は右の如き兩敵國人を相手に戦つてゐるのであるから、我々もま
た敵に負けない頑張り、粘りが必要である。

1、皇國民特有の粘り強さを發揮せよ

日本は古來大きな國難に際會し、常に勝利を得てをる。彼の蒙古襲
來の時の如きは文永から弘安にかけ、前後九年の長期戦を戦ひ抜いて
をる。忽必烈は東西に威を揮ひ、近代裝備を以て日本を一となめにせ
んと押し寄せ來つた。これに對し日本は舊式裝備を以て對抗、文永の
戦ひでは九州の一角は敵に占領されんとしたのであるが、それを撃ち
攘ふことが出來たのは、神風にもよるが、何よりも旺盛な戦意を以て敵
に當つたからであり、菊池一族の如きは、朝から晩まで戦ひつゞけ一歩
も退かず、敵の猛威を喰ひ止めた。この粘り強さが蒙古軍を凹ました。
農村に於ても、舉國一致の精神が燃えて、壹岐對馬の農民は前後二回の
蒙古軍の來襲を受け、その家族達と共に潔く國に殉じた。この壯烈な

精神が蒙古軍をして舌を巻かしめたのである。

日露大戦の旅順港二〇三高地の奪取戦は、五敗六勝で、日本軍は、五度敗けて六度目に完勝したのであつた。ガダルカナル島以後の戦容は、彼我決戦へと突入し、到るところで屍山血河の血みどろな戦ひが展開されてゐるが、前線勇士は、この祖父の烈々たる血を承け繼いで、敵米英撃滅に挺身しつゝあるのである。國民もこの將兵と一つ心になつてその特有の粘り強さを發揮し、眞摯敢闘、工夫啓發し、如何なる困苦缺乏に遭遇するとも、これにへこたれることなく、飽くまで、敵屈服まで頑張り通さねばならぬ。中途半端な妥協を思ふやうなことがあつては、斷じて勝利し得ないのである。故元帥の頑張り、負けじ魂、非妥協の精神こそは、戦ふ日本全國民の精神でなければならぬと存ずる。

前にも述べた如く、今日の戦ひは、國と國との綱曳にも譬ふべき國家

總力戦であり、この綱曳に勝ち抜く爲には、一弛一緩によつて氣を許したり、悲觀して手許の力を抜くが如きことがあつては、絶對勝を制することは出来ぬ。官と云はず民と云はず、老若男女の別なく、舉國一體、その奥へられてをる持場々々の綱の中に全精力を打ち込み、力一杯勢一杯、一億の心を合せ、同じ方向に引つ張らねばならぬ。前線と銃後は一本の太い日本精神と云ふ綱によつて繋がれてゐる。この綱から離れ、この綱曳を見物するが如き態度の人があると、前線から後方まで綱はピンと張り切ることは出来ぬ。後方に於て綱がたるんでをるやうなことで、眞の國家の底力は出ず、前線の犠牲を多く出す結果となる。敵は必死になつて總力を擧げて反攻を試みてをるのである。だから我々日本國民も、最大限の能率をこの際必死捨身となつて擧げ、敵の非望を破摧し、金甌無缺の我が國體を擁護し、以て 宸襟を安んじ奉らね

ばならぬ。

信 義

故山本元帥は、前述の如く剛毅負けじ魂の性格の半面、信義を重ぜられ、實に豊かなる愛情を發揮、先輩友人とは心からなる交際を行はれ、後輩に對しても、實に細かい配慮を行つてをられたやうである。或る人が新聞に發表してをるのを拜見したのであるが、元帥が或る時長岡に歸省せられた時、或る舊友を訪ねた。その豊かならぬ家庭の庭には菜が一本植ゑてあつた。舊友はなんとかして款待しようとする轉手古舞をしてゐるのを見た元帥は、『自分は菜びたしが大好物で、これさへあれば、飯を五杯でも六杯でも食べられる』と云つて菜びたしを作らせ、う

まい、うまいと褒めながらそれで四五杯平げたのには、舊友は涙を流さんばかりに喜んだと云ふことである。元帥の一面にはかうした温かい思ひ遣りがあつた。

またこれも新聞で知つて感動させられたことではあるが、嘗ての長岡中學の同級生に金子禎治さんといふ人がをられ、病氣で五ヶ年間も病床に在り、失職して困苦缺乏の境遇にあると知つた元帥は、時折り見舞金を送つて激勵されてをつた。その後金子さんが病氣全快して野澤さんと云ふ人の世話である會社に勤めることになつた。この事を知つた元帥は大いに喜ばれ、早速返辭を出し、『見ず知らずの他人ではあるが、心から感謝した。ついでには野澤氏に是非私の感謝を傳へて同封の書を差上げて欲しい』と、次の自作の和歌一首を添へられたといふことであるが、舊友の世話をやり、その友の恩人を、自分の恩人の如く

に感謝するといふことは、如何に故元帥が知友と心の交りをされたかと云ふことを物語るものである。

人の世に立たむ教はあまたあれど

誠一つのほかなかりけり

1、男と男との交際

相互に絶対の信用を以て交はり得る友達と云ふものは、さうざらにあるものではない。信用することは、信用せられることである。信用せられるだけの人間の深さを自分に持たねば、一生を通じて變らない一人の友さへも持つことはむづかしいと思ふ。「士は己れを知るものために死す」と云ふ言葉もある。知己のない人生は淋しい。知己のない人間同志の社會は榮えない。本當に男と男との信義が盛上る

つてこそ、國家は大を成すのだと信ずる。男と男との交際は、一旦契つたことは首が飛んでも變へないといふ信義の上に立たねばならぬ。

よく口先ではなか／＼立派な事を云つて交際するが、それは自分の都合のよい場合のみで、都合が悪くなると、振り向きもしないと云ふ人もある。これは『まごころ』のない利己主義者であつて、かゝる人に限つて、見ず知らずの人に對しては如何なる迷惑をかけようが、或は自分の行爲が他人に如何に損害不便を齎す結果となつても、かまはないと云ふ生活態度に陥り、戦時生活を攪亂する闖行爲などに趨ることになり、道義は全く蹂躪され秩序が紊れる。また一旦約束はしたが、利に迷つて、昨日の話を今日は破約すると云ふことになる、人と人との交際は全く不安心なものとなり、腹を割つて話が出来ないと云ふことになる。

信義と云ふことは、人間社會の秩序の基本である。信義を立てるには、『まごころ』の附合ひが必要である。則ち信用せられるだけの、『まごころ』を以て交際して行くことである。こゝに男と男との約束と云ふものが成立する。信義の出発點は朋友にある。人が身を立て道を行ふためには必ず朋友の助けが必要となる。故に良き友を知つて、互ひに腹の中を打ち割つて語り、長所短所をお互ひに補ひ合つて、或は患難に際しては、お互ひ助け合ひ、過失があれば忠告してこれを戒め、終始一貫交りを變へない交際が必要である。この精神を以て廣く人に接することによつて、他から信用されるやうになるのである。

今日我國が一番に要求してゐるのは、本當の日本男子である。所謂『益良雄』を求めてゐる。益良雄と云ふのは、支那の『君子』、西洋の『紳士』とも云ふべきものであるが、『益良雄』とは完全に澄み切つた男の

意である。詰り、私心や慾心邪心のない、『まごころ』を有つた、心中曇りなき男であつて、信用のおける人物、則ち信義を立て得るの人を云ふ。この男と男との話が出来るやうになれば、政治や經濟は勿論、その他大抵のことはすらくと力強く運んで行くに違ひない。

陰徳と謙讓

前にも一寸觸れたが、故元帥は常に郷土の爲、友人の爲、部下の爲、また一般の爲に、物質的に、或は精神的に、色々と盡してをり、所謂陰徳を冥々の中に積んでをられたのである。或る時は月給袋から困る人に分けたり、家へは殆んど持つて歸らなかつたこともあつたと云ふことを聞いてをるが、元帥自らは決してそれを口外せず、また他の人がこれを

語ることを好まなかつた。

前述の恩師の子供への學費援助、或は友人の治療代を送つたことなども、陰徳の一例であるが、木村とか云ふ自分の家で使つてゐた女の家庭があまり豊かでないのを知つて、時々金を送つて面倒を見てやつてをつた。元帥が戦死してから届いた手紙の中にも三十圓の金が入つてをつたと、或る人の話にあつたが、さういふことは誰も知らずにゐるわけである。

故元帥は非常に謙讓な人で、自家廣告とか、高ぶるとか、銜ふとか、さういふやうなことを一切やらなかつた。職務上の事については遠慮なく徹底してやるが、一度び私事に及ぶと謙讓そのものであつた。或る出版社で山本大將傳といふものを書いて、印刷も済んで出すばかりになつてをつた。それを知つて元帥は罷り成らぬと云ひ出した。さう

いふことは一切好まなかつたのである。出版社の方ではその本を出さないと何千圓かの損になる。そこで私の所へ来て、自分のやうな小さな社では非常に困るのでなんとか出来ないてせうか、と云つて來た。そこで私はそれは困るだらうが、困るからと云つて自分にはどうにもならぬ、海軍省に御願ひに行つたらよからうと云つて置いた。

このやうに故元帥は自分の事を云はれることが非常に嫌ひであつた。慎獨と云ふか、自分は一つも喋らずに黙々としてゐるが、人の爲には非常に世話を焼いてをる。それをいつも知らん顔をしてゐた。自分の手柄と云ふことは決して云ふ人ではなかつたのである。かくしようとしてやるのではなく、斯くしなければ自分の氣が濟まぬ、『やむにやまれぬ』この誠心が、陰徳となつて發露したやうに考へられる。

1、顯徳たる勿れ

故元帥が冥々の中に陰徳を積まれたと云ふことは、探つて以て範とすべき點であると思ふ。日本人の長所は自己を犠牲にしても他を活すといふ義侠心の強さである。人情に厚く、義に勇むといふのは日本民族性の誇るべき徳性の一つである。そこから人の爲に盡す陰徳の精神が發露する。故元帥にあつては陰徳を積まれるといふことは特別の行爲ではなく、當然のこととして行はれてゐたやうにも思はれる。

明治天皇御製

おのが身はかへりみずして人のため

盡すぞひとの務なりける

褒められようとか、よく思はれようとか、かゝる氣持から出發した陰

徳は『おのが身を』かへり見つゝ行ふ行爲で、『我』にとらはれ『まごころ』がない。西洋の慈善などといふ精神も、それ以上に出ることはない。褒められようとか、自己宣傳の爲の行爲は、陰徳ではなく顯徳であり、往々にして偽善に陥り易いものであるが、眞の陰徳は、冥々の中に行はれるものでなければならぬ。かくしなければ人の道を踏み行ふ上に於て氣が濟まぬと云ふ『まごころ』の發露にして、初めて人を感動せしめ得る。我々は故元帥に學び、この日本民族の誇るべき徳性を發揮すべく努めたいものと思ふ。『自分』を顧りみず、人の爲に盡すといふ精神は『利己的精神』とは正反對のものである。總ての人が、その本然の徳性を發揮するやうに努めることになれば、國內は非常に明るくなると思はれる。

陰徳を積み得る人に限つて、自家廣告とか、高ぶるとか、衒ふとか云ふ

ことはやらない。故元帥がそれであつた事は前述した如くである。そこに大變な奥床しさが感ぜられる。古來日本人の長所としては、この謙讓の美德が擧げられて來てをる。自分を飾り、或は外觀を立派に見せかけるといふことなく、自ら數歩へり下つて、お互ひの間の禮儀にも慇懃に禮を厚くし、度を過ぎると思はれるほど、お互ひが譲り合ふ。男もさうであるが、女は尙更さうである。これも日本民族の優れた徳性の一つである。かういふ徳性があればこそ、人を押しつけても座席を取らうとか、老人や子供があつても席を譲らうとしないといふやうなことを不道德の行爲として、嫌惡する感情を有つのである。お互ひが尊敬し合ひ、或は譲り合ふことになれば、戦時生活はもつと明朗になるはずであると考へられる。特にこれから世に立つ青少年諸君は、これらの民族徳性を大いに發揮すべく努めて欲しいと思ふ。

廉直・質素な生涯

故元帥は廉を以て身を律し、清貧に甘んじたる模範的な人であつたと思ふ。何んの飾りけない人であつた。故元帥が結婚を申込まれた際、『自分は何年何月、これくの病氣をしたことあり』と書き加へられ、見合ひの席上、戦傷の身體を裸にして、これでもよいかと念を押したといふことを、仲人になつた人が話したのを新聞記事で見たが、いつも素裸にしたやうな性行の持主で、うはべを飾り、内面を祕すといふやうな所はなかつた。清廉潔白とは、故元帥のために用意されたやうな言葉であつた。

一事は萬事と云ふが、故元帥が清貧に甘んじてをられたと云ふこと

は、元帥の住宅を見れば、それで十分かと思ふ。或る人は、『こんな所に海軍大將が住んでをられるのか』と、その質素な住宅に驚いたとのことであるが、海軍次官當時は、前にも述べたやうに、水交社を海軍省の延長としてをつた。それは家が狭くて、人と會ふことが出来ないの、水交社で面會し、家ではたゞ就寢するだけであつた。そして土曜から日曜にかけては一切の面會を斷つて、家庭に親しまれたと聞いてをる。

この清貧に甘んずるの風格は幼少の頃より培はれてをつたやうに聞く。則ち『物資を愛せよ』と云ふことが、長岡藩の藩風であつたと同時に、生家高野家の家憲の一つであつたと云はれる。維新の戰禍を受けて、故元帥の幼少の頃は、實家は相當赤貧に曝され、小學校から歸ると、薪割をさせられ、學校で使用する雜記帳などは、隅から隅まで書き、字も出来るだけ小さく書いて、中學校時代でも新しく買つた手帳は一冊も

なく、小學時代一度使つた紙を裏返しにして使用したといふことを、或る人が書いてをるが、かゝる幼少の頃の刻苦勉勵が、故元帥の廉直質素な性格の基礎になつてゐるやうに思はれる。故元帥の結婚に對する態度と云ひ、或はこの質素な生活と云ひ、戰時下、特に青少年諸君に訓へられる所多いことを痛感する。

1、結婚は御奉公の爲の結合

故元帥が大尉に任官された當時の事、或る長岡藩士の娘を妻にと切に勧める人があつたが、元帥は、『軍人である僕の女房は、貧に堪へて、いつ夫が陛下の御爲に死んでも、獨身で子供を育てて行ける女でなければならぬ。そのお嬢さんには、それが出来ないだらう』と云はれ、斷然應じられなかつたと、知友の一人が語つてをるが、この結婚に對す

る嚴肅なる態度は、單に軍人のみならず一般青年の態度でなければならぬ。いやうに思はれる。一時米英の流行思想に毒されて、自由戀愛などが青年男女の間に行はれ、結婚といふものに對する嚴肅さを見失ふが如き事態を招來したが、結婚と云ふものは、陛下に對し奉り、國民としての任務を遂行する爲の結合である。則ち男子は、次代の生命力の源泉として、臣民の道を踏み行ふ爲に、適當な配偶者を選び將來家族の増大を圖るといふことが最大の眼目であり、忠良なる子孫を殖やすと云ふことに誇りを感じなければならぬ。

從來結婚の對象となるものは、往々にして相手の身分や財産や、或は地位とか享樂であり、したがつて、少々白痴でも、健康な女性が喜んで嫁した傾向なしとしないが、要するに結婚の最大眼目は前述の如きものであり、健康・健全・忠良なる子孫の繁榮が目的であるから、身分や財産や

地位は兎も角として、喜んで苦樂を共にして行ける相手を選ぶことが必要である。故元帥が『貧に堪へ、いつ夫が陛下の御爲死んでも獨身で子供を育てて行ける女でなければならぬ』と云はれた意味はここに於けるわけで、戦時下の青年諸君は何時お召が來るかわからないのであるから、その配偶者を選ぶには、この點に留意しなければならぬと考へる。元帥が、『そのお嬢さんにはそれが出來ないだらう』と云はれた言葉にも、無限の味があるやうに思ふ。働くことを厭ふ白い手や、贅澤に馴れたお嬢さんでは、夫の死後、獨身で子供を育てて行くと云ふことは、なか／＼むづかしいと考へられたのである。青年諸君も、結婚は御奉公の爲の結合であり、國家繁榮の基礎であるとの嚴肅さを以て配偶者を選び、苟しくも、そこに遊戯的・享樂的な思想を介在せしめることがないやうに努力すべきであると考へる。

故元帥が見合の席上、戦傷の身を裸にして、『これでもよいか』と念を押されたといふこともよき教訓である。戦時下に於ては若い健康な青年諸君は第一線に在つて御奉公する。一死奉公を誓つて出て行くが、不幸戦傷によつて後送される青年も數多くある。眼を失ひ或は聴覺を失ひ、手足を失ふ兵士もある。この爲、再び前線での御奉公が叶はないことになるが、それらの勇士は國內に留まつて再起奉公さるゝわけであるが、國內の女性達は、この勇士達の眼となり、耳となり、手足となつて、その忠烈を共に活すやう、進んで伴侶者となられんことを希望する。盡忠は一代限りではない。子孫から更に子孫へと永世續くのである。勇士達の純血を活すことは、現代女性に與へられた責務であると考へる。外形より『まごころ』の結合こそ、結婚の本道本質であることを自覺して貰ひたい。

2、戦時生活は質素が基底

戦時生活に徹底する上に必要なものは、廉直質素と云ふ要素である。この點故元帥の廉直質素を見倣はねばならぬと思ふ。近代戦は驚くべきほどの多量の種々の物資を必要とする。金も要り、人も要るが、結局物である。驚くべき大消耗戦が今後も控へてゐる。故にいくら生産力を擴充しても追付かない。國全體は今、非常な犠牲を忍んで生産の増大を期してゐるのである。そこで國民生活を速かに戦時に相應しいやうに建替へなければならぬ。この點大東亞戦になつてから可なり行届いた所もあるが、まだ不十分である。

無駄と思はれることは直ぐ止め、各々常識を働かして、見えをすてて生活を戦時に相應しいやうに徹底すること、突きつめた眞剣な態度が

必要である。一寸した心掛が、國全體から見れば相當の節約になる。物を消費する時の心構へも、自分の物だから、或は自分の購入したものであるから、どんなに使つても構はないと云ふやうな考へだと、小さな無駄は、積り積つて國家の莫大な損失となる。生産者の勞苦を偲び、國家の損得をよく考へて、一物と雖も無駄なく使ふやう心掛けたきものである。

戦時にあつて贅澤な生活を追ふといふやうなことは恥づべきことで、總ての人々が廉直質素を旨として、御奉公專一にしなければならぬと思ふ。さうすれば、闇取引もなくなり、物資は不足しながらも、なほそこに明朗なる戦時生活が築かれて行き、人々は貧苦を憂へず世紀の大試煉を突破して行く、磐石不動の體制が整備されるものと信ずる。

文武兩全

故元帥は類ひなき指揮官であつたと共に、一面文學上の造詣が深く特に和歌の道を究められた、優しき文の人でもあつた。こゝに元帥の剛と柔、硬と軟、力と美の多彩な風格の一端を見ることが出来る。正に元帥は文武兩全の名將であつたと云へよう。故元帥は、『武人として歌くらゐは嗜みとしてやらねば……』と云つてをられた。和歌を始めから十四五年、大東亞戦には『萬葉集』を携へて出陣されたと云はれる。

専門家の云ふ所を聞くと、晩年における故元帥の作は、至誠盡忠あふるゝ大格調を盛り込み、幕末維新の勳皇歌に比すべきものがあるとの

ことである。無粋な私などは到底その一々について述べる資格はないのであるが、前述以外の故元帥の歌を次に記して説明に代へることにしたい。

|| 武井大助中將との歌合戦 || (十六年春)

十億の亞細亞の民にあたらしき

光直さす時は來向ふ (武井中將)

一億のわれも一人ぞ大いなる

國の歩みと共に進まん (故元帥)

|| 昭和十七年十月南太平洋海戦 ||

かへりこぬ空の愛兒や幾人か

けふも敵艦に體當りけめ

今宵もや此月影をしるべにて

仇うち居らむ空の男の子は

|| 十七年十月廿七日 ||

大海原見わたすきはみ影もなく

昨日一日仇を拂ひて

|| 十七年十二月八日 ||

一とせをかへりみすれば亡き友の

數へ難くもなりにけるかな

|| 十八年元旦 ||

おほけなくも海の護りにまつらひつ

四度び初日ををろがみにけり

|| 山口・加來兩提督を哀悼して ||

燃え來る炎を浴みて艦橋に

立ちも盡きしかわが提督は

海の子の雄々しく踏みて來にし道に

君たちつくし神さりましたぬ

|| 昭和十六年九月同郷同窓親友目黒眞澄氏へ贈る ||

鰲艦蔽海決雌雄

皇國存亡在此時

謀制機先虜軍滅

檣頭高掲日章旗

結 語

以上大體私の知れる範圍を中心として、故元帥の精神に觸れて述べた積りであるが、なほ十分に云ひ盡したりとは云はれない。要之、故元帥は何をやつても、可ならざるなき卓抜の人であり、武は徳を兼ねて、海軍軍人の龜鑑であり、併せて國民の師表として仰がるべき人であつたと思ふ。故元帥が、『終始一誠意』の勅諭を遵守せられ、死の瞬間まで修養せられたが如く、人はこれによいと云ふ修養の限界はない。特に青少年諸君は、故元帥の言行に學ばれ、元帥の精神を精神として、この未曾有の時局下に御奉公すべく努力せられんことを切望する。

益良雄をの行くてふ道を行ききはめ

わが若人らつひにかへらず

と故元帥が哀悼された、眞珠灣玉碎の軍神達は、小學校を出ると直ぐに海軍に入つて、日本人としての心を磨いた。若人であつたことは、前に述べたが、若人の最大の目標は、『益良雄』の行くといふ道を行き極めることにあらねばならない。從來青少年諸君の中には、上級學校に進むのは、就職の資格を取るために卒業證書を得るにあると云ふやうな考への者があつた。學校を出ては、地位の向上、立身出世を一切の念願とすると云つた状態で、修業中の青少年の念頭を離れなかつたものは、どの會社、どの工場は幾ら幾ら、どの會社より幾ら多く報酬を出すかと云ふことであつた。自己の生活のみを念じて、國家の理想や目標などについては殆んど無關心状態にあつた者も一部にはあつたやうに思は

れるが、眞珠灣の一撃は、同時に青少年諸君のこの古い考へ方を打破する契機をなしたやうに思ふ。

自己一身の榮利榮達など一切眼中になき益良雄の捨身の行動によつて、青少年諸君の行くべき進路がはつきり示され、一部無自覺の青少年諸君も、盡忠至誠の行動が如何に尊く麗はしいものであるかを知り、胸奥にある日本精神が呼び醒された。而して自己中心の考へを離れ日本全體を考へ、更に明日の世界を考へようとするやうになつたことは、喜ぶべきことであると思ふ。

悠久二千六百餘年を貫いて國史を輝かしいものにしたのは、青年である。青年の情熱、勇氣、氣魄、體力である。戦争の華が青年であると同様に、その青年の情熱と意氣とが研究に向ふと、偉大な學者の輩出となり、その氣魄が産業方面に向つて突入すれば、農業を以て日本を養ひ、商

工を以て經濟を向上せしめる。青年といふのは必ずしも年齢の差等を以て區別されない。心情の上に於て常に若々しさを有つ者は、老人たりと雖も青年であると思ふ。常に理想を掲げ、而も孜孜として倦まないものこそが眞の青年である。

今や世界を擧げて大戦の渦中にあり、戦禍の波及するところ底止する所を知らざる如くである。戦前七十數國の大小國家はこの戦ひを通じて、或は興り、或は亡びることであらう。老朽國は衰へ、新興の氣魄を有つ國が興ることは自然の理である。而して世界中、最も古く、最も新しく、青年の血脈と精神を常に有つてゐる國は、皇國日本を除いてはどこにもないのである。我を後進國の如く見下し、昂然自尊大に構へてをつた世界各國は、我が底力に喫驚して、その神祕の謎を解かんとして懸命になつてをり、或はそれに學ばんとしつゝあるが如く見られる。

皇國の底力の根元は皇國體であり、その國體に發する日本精神である。しかし自負するのはよいが、自ら驕つてはならない。國民一部の小智慧や、目前の小利や、小名譽の爲に、皇國の眞の底力はまだ出てをらない。それを出さなくてはならぬ。今や最大の決戦期に臨みつゝあるのである。

敵國米の指導者が、『青年こそ米國の運命を左右するものなり』と叫び、青少年の奮起を望んでをることは前に述べたが、見方によつては、日米青年の決戦とも云はれよう。日本の青少年諸君は、斷じて、敵國青少年に劣るやうなことがあつてはならぬ。その爲には、『益良雄の行く道』を極めなければならぬ。國內にある青少年諸君は『益良雄』たるべく大いに修養を積み、その情熱と意氣とを研究に、作業に、注ぎ込み、國家飛躍の原動力とならねばならぬ。故山本元帥が身を以て示され

た道を繼いで、決死で起ち上れ！

青少年諸君は次代を脊負ふものである。國家の理想は同時に青少年諸君の理想であり、國家の使命は同時に青少年諸君の使命である。青少年諸君は、天地の公道と國體の本義を知り、その良能を發揮して有爲の人物『益良雄』となり、國家の使命遂行、理想達成の爲挺身すべきであると思ふ。國家が眞に諸君に期待するところのものは、その情熱と勇氣と體力とである。

常在戰場 終り

不	複
紙	製

昭和十八年十二月五日印刷
昭和十八年十二月十日發行

出版會承認い320729
初版發行10,000部

配給元	發行所	印刷所	印刷人	發行者	編者	述者	常在戰場
日本出版配給株式會社 東京都神田區淡路町三ノ丸	大新社 東京都下谷區車坂町八九 電話下谷四七六七番 振替東京一七一七七番 出版會員一六〇九〇番	東京三印所 東京三一九八	菅生定祥 東京都神田區錦町三ノ二 協榮印刷所	鈴木勝也 東京都下谷區車坂町八九	七圓今朝一	米内光政	④ 定價一圓七十錢 特別行爲三錢 稅相當額三錢 合計一圓七十三錢

978



82

終



大新出版社

壹圓七拾參錢(稅)價賣